

2019 年度事業報告（大学）

1. 基本方針

本学の教育理念は「リベラルアーツ教育」、「グローバル教育」、「キャリア教育」を三本の柱とし、「リベラルアーツ教育」においては、キリスト教に立脚した人格教育により冷静な判断力を備えた「ぶれない個」を育む。「グローバル教育」においては、自己の意思を明確に表現し積極的に討論できる論理的思考力を涵養し、それを積極的に伝達し得る言語力を養成し、海外研修などを通して国際感覚を取得する。「キャリア教育」においては、女性の全生涯にわたって活躍できるライフキャリア概念を構築し、地域社会並びに国際社会に貢献できる女性の育成を目指す。

2012年度の大学改組以来、国際教養学科は恒常的に定員割れを起し、厳しい状況に陥り、また人間生活学部においても少子化及び他大学での同系列学科設置の影響から改革を迫られる状況に直面した。そこで2014年から地方の小規模女子大学としての存続発展の可能性を模索研究し、法人・大学が一体となって大学再改革に取り組み、遂に2018年度から新体制でスタート出来るところまで改革を進め、新設の人文学部では定員の1.3倍を確保することができた。

広島女学院ならではの「ライフキャリア教育」へ舵を切り、2018年4月より、人文学部・人間生活学部・共通教育部門に再編し、共通教育部門にはライフキャリア科目を45科目設置する等、「女性の一生涯」を視野に入れた改革を実現させ、恒常的な定員割れを克服することができた。

共学化が進む中、「本学の女子教育にかける情熱と使命」を理解していただくために全学が一つとなって取り組み、入試においても広報戦略を刷新し、定員確保を安定させるべく努力する所存である。

一生涯の大学としてのコンセプトのもとにエンパワーメントセンターを開設し、「広島経済同友会との包括的連携」を2017年に締結し、女性活躍時代に貢献できる学生を育てるとともに、卒業後も人生の節目々々に戻ってリフレッシュできるように新しい展開をスタートさせ、さらなる発展に向けて邁進する。

2. 具体的アクション

2019 年度事業計画	目標達成のための手段等	具体的な目標（数値目標）	執行状況	課題と対応
<p>【大学全体】</p> <p>○改組後の定員確保の確立</p> <p>○キャンパスの活性化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度入試の総括、近隣大学の動向の情報収集、進研アド、リクルートとの情報交換をふまえた入試戦略の見直し ・2020年度開始の共通テストへの対応の検討 ・教職員と学生との距離を近くするため、教職員のネームホルダー着用の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部、学科の入学定員を充足し、最終的に入学定員330名を確保する。 ・入試委員会で協議する。 ・2019年度は、教員は4～5月の2ヶ月間の着用、職員は原則通年着用で試行する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年度の入学者は入学式時点で313名であったが、コロナ禍のため学納金の工面がつかないことを理由に1名が入学取消しとなり312名となった。 ・文科省の方針に沿い、かつ本学の応募者の現状を勘案し、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜に分類し、各入試のネーミングと入試内容、日程を大幅に改正して入試要項を策定した。 ・予定通り実施した。今年度中に結果の検証を行い、次年度の方針を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際英語学科と児童教育学科の2学科の定員割れが原因である。5月に学科独自の重点校への高校訪問を実施予定である。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で当初計画した入試広報が困難になりつつあるので、HPやオンラインを利用した広報や、毎週末の個別キャンパス見学を検討している。 ・次年度の入試に向け、従来の入試広報の内容、スケジュールの見直しが必要である。 ・12月に各学科で本年度の取り組みについての評価を行い、一旦意見集約した。次年度も2019年度と同様の内容で実施することとする。

<p>○教育理念の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理念に基づいた教育を推進するためにFD活動をより活性化する必要がある。そのためにFD研修のあり方を見直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あやめ祭実行委員会の活動促進によるあやめ祭の参加模擬店数の増加 ・English Island の開催 ・FD研修を学部と大学院とでテーマを変えて個別に開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あやめ祭の模擬店の出店数を増やす（目標数；昨年度比で3店増）。 ・前期、後期に各1回以上開催する。 ・学部対象で2回以上、大学院対象で1回以上開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出店数は30で、昨年より9店増した。教職員有志の参加も増え、前年に比べ、全般的に盛況であった。 ・今年度は学長と関係教員のスケジュール調整が叶わず、実施できなかった。 ・本年度は学部対象で7回、大学院対象で1回実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度と同様に主に学生課が主体となって早期にあやめ祭実行委員に働きかけていく。併せて教職員にも声かけをする。 ・次年度は、English Island の開催が難しいため、英会話カフェ、Lunch Time 英会話への参加を呼びかける。 ・特に単位の実質化、学びの可視化の実現を目的に次年度も引き続いてFD研修には力を入れていく。
<p>【教員組織編成】</p> <p>○改組に伴う教員組織の確立（教員数の決定）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2018年度に引き続き大学将来計画委員会において、各学部、学科の事情を考慮しつつ協議を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2018年度の協議で出た素案を基に議論を進め、2019年度内に教員数の結論を出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学将来計画委員会で教学、経営の両面から概ね妥当と考えられる教員数を協議し一定の結論を得た。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後は必要に応じ、法人と協議する。
<p>【大学運営】</p> <p>○認証評価改善報告（2022年7月提出予定）への対応</p> <p>○教員評価の制度づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2018年に実施された大学評価の結果において、改善勧告を受けた事項（右記参照）を優先して改善に取り組む。改善策の立案、進捗管理は内部質保証委員会が主体となる。 ・教員評価の手順と基準を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生受け入れ状況の改善：第二次中期計画に従って定員確保を継続する。（上記、諸活動に関する方針の履行・財政の健全化・入学定員の確保を参照） ・大学院研究科の教育の改善：研究指導計画、指導方法に関する内容を具体的に明示するために大学院要覧とオリエンテーションの内容を見直しする。 ・教員評価に関する制度設計を2019年度に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共通テストが導入される2021年度新規入試に向け、本学の入試制度の全面見直しを入試委員会で行い次年度の募集要項を策定した。 ・既に改善し、実施した。 ・全学人事委員会において検討中である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度の募集に向け、入試の変更点を高校生、保護者、進路指導教諭へ分かりやすく丁寧に広報していく必要がある。特に6月までの広報活動が重要であるため、例年よりもこの時期の入試広報・渉外に傾注する計画を立てる。（上記、改組後の定員確保の確立の項を参照） ・2020年度に試行できるように最終的な制度設計を完了する必要がある。
<p>【エンパワーメント活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性の一生涯をサポートするエンパワーメントセンターの充実をはかり、卒業生が生涯にわたって大学と関わりを持ちながらライフキャリアを築いていける体制を強化する 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアカウンセリングの実施。 ・「卒業生の集い」実施。学長が講師を務める春季宗教強調週間を同窓生に公開し、今年度 	<ul style="list-style-type: none"> ・業務委託によりキャリアカウンセラーを配置。原則土曜日に実施。 ・前年度（約70名）を上回る参加者数を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・希望者を対象に土曜日に実施している。 ・学院報、ホームカミングデー等で開催を通知し実施済み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・女性の一生涯をサポートするエンパワーメントセンターが4年前に立ち上げられて以来、経済同友会との連携活動、学内・学外における講演活動等を展開してきたが、次年度は更なる活動の充実を計るため、エンパ

<ul style="list-style-type: none"> ・広島経済同友会との連携事業の実施 	<p>の「卒業生の集い」とする。ホームカミングデー、学院報にて広報。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生を対象としたリカレント教育 ・転職・再就職支援。 <p>・キャリアセンター協力のもと、広島経済同友会まちづくり委員会、ひとづくり委員会を通じ、地域との連携を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度から修了証プログラムを実施。 ・「転職・再就職セミナー」を実施。 <p>・地元企業の見学会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演会の実施 ・企業説明会の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・修了証プログラムを改訂し、1月の学院報に同封し同窓生に告知。 ・キャリアコンサルタントの竹本寛美氏を講師とする講演を2回実施。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 実施日：7月13日 テーマ：「私の働き方改革～新しい時代に今私ができること、したいこと～」 2. 実施日：11月16日 テーマ：「自分への表彰状～頑張る私にエールを送りたい～」 <ul style="list-style-type: none"> ・2020年3月5日（木） 学長による広島経済同友会幹事会講演（未実施） 題：日本における「ダイバーシティ」の課題～ジェンダー平等と女性リーダーシップを中心に～ 	<p>ワーメントセンターを大学の組織図の中に位置づける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期となったため、再度日程調整を行い、2020年度に実施をする。 												
<p>【国際教養学部・国際教養学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職支援の強化 	<ul style="list-style-type: none"> ・就職課と連携して、3年生の就職ガイダンスへの出席状況や3・4年生の進路登録票の提出状況、就職課との個別面談状況、就職活動及び就職内定状況を学科として把握し、きめ細かい就職支援を行う。就職委員会委員に国際教養学科主任が入ることにより、就職関連の状況を早く確実に把握し、その情報を、学科会の審議報告事項に遺漏なく反映する。 ・企業見学やインターンシップへの参加を積極的に学生に呼び掛ける。 ・教員が行う企業訪問につき、1教員につき2社という設定にこだわらず、授業その他をとおしての教員と企業との結びつき、ゼミの卒業生の就職先などを考慮して、学科会で企業訪問先案を策定し、教員の希望、学科の戦略に応じて効率的かつ実質的な企業訪問を行う。したがって、教員によっては、3社以上の企業に挨拶に行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の希望に沿った質の高い就職を目指すが、数値としては就職率・実就職率ともに2018年度を上回ることを目標とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・就職率・実就職率ともに2018年度を上回る数値になった。就職委員会に学科主任を含め3名（それぞれ英語メジャー、国語メジャー、社会メジャーに対応）が入り、就職課や各ゼミ担当者（教員チューター）と決め細かい情報共有を行いながら、就活支援を行ってきた。今後も、引き続き、就活支援に万全をつくす。就職未決定の学生には、かなり支援の必要な学生が多く含まれているので、今後、数値をさらに上げていくためには、より手厚い支援を続けていく必要がある。また、数値だけではなく、質の高さも求めながら、就活支援を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年5月1日現在で、就職率・実就職率ともに2018年度を上回る数値になった。 <table border="1" data-bbox="2418 1218 2878 1396"> <tr> <td>2019年度</td> <td>就職率</td> <td>96.7%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>実就職率</td> <td>89.8%</td> </tr> <tr> <td>2018年度</td> <td>就職率</td> <td>95.3%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>実就職率</td> <td>85.6%</td> </tr> </table> <p>特に、CAやGS、英語教員（国際教養学部開設以来、現役合格は初めて。）など、難関といわれる職種への就職がめだつ。また、ヒューマックスなど、今まではまったく試験を受けても就職できなかった企業への就職も目立つ。概して、質の高い就職内定状況であるといえる。 これは、売り手市場といわれる社会情勢やキャリア支援課の手厚い支援</p>	2019年度	就職率	96.7%		実就職率	89.8%	2018年度	就職率	95.3%		実就職率	85.6%
2019年度	就職率	96.7%														
	実就職率	89.8%														
2018年度	就職率	95.3%														
	実就職率	85.6%														

				<p>によるところが大きいですが、学科としても、就職委員会に学科主任を含め3名（それぞれ英語系メジャー、国語系メジャー、社会啓メジャーに対応）が入り、就職課や各ゼミ担当者（教員チューター）と決め細かい情報共有を行いながら、就活支援を行ってきた成果でといえるであろう。今後も、就職希望者全員が就職できるよう、引き続き、就活支援に万全をつくす。</p> <p>教員が行う企業訪問についても、学科で訪問先を検討し、新学科のインターンシップやキャリア・スタディの内容と連動しながら、学科教員が手分けして行っている。</p>																
<p>【人文学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぶれない個」を形成する教育の確立 ・「多様な価値観・生き方」を形成する教育の確立 ・「寛容と協働の精神」を育成する教育の確立 <p>・一生涯を視野に入れた教育プログラムを構築し、自らライフキャリアを築いていくための基礎力を育成する。</p> <p>・2021年度の完成に向けて教育課程を着実に履行し、大学及び各学部各学科の教育目標を確実に達成</p> <p>・教育研究の質向上に絶えず努め、顕著な学習成果を達成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全学基礎科目の「キャリアプランニング」「初年次セミナー」「キリスト教の時間」を通し、「ぶれない個」「多様な価値観・生き方」「寛容と協働の精神」の形成に欠かせない本学の歴史、理念を学ばせる。 ・人文学部必修科目の「キャリア・スタディ・プログラム」の授業を通し、一生涯を視野に入れたキャリアプランの支援を行う。 ・人文学部必修科目の「人文学入門」を通し、人文学についての理解を深める。 ・アクティブラーニング、少人数教育を通し、顕著な学習成果を達成する。 ・人文学部で次年度予定している、フィールドワーク、海外研修、地域連携活動を通して、行 	<ul style="list-style-type: none"> ・「初年次セミナー」「キャリア・スタディ・プログラム」のルーブリックの3つの到達目標について、最後の回の時点での自己評価がそれぞれ平均 2.5 以上獲得できるようにする。 ・「人文学入門」の授業評価アンケートの満足度「そう思う」「強くそう思う」の合計が 70%以上獲得できるようにする。 ・「初年次セミナー」は、顕著な学習成果を達成するため、少人数で実施する。1クラス 20 名前後。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年度の「初年次セミナー」の到達目標達成度自己評価平均値は以下の通りである。(3/31現在、小数点第2位四捨五入) <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>目標 1</th> <th>目標 2</th> <th>目標 3</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>日文</td> <td>2.8</td> <td>2.8</td> <td>2.8</td> </tr> <tr> <td>英語</td> <td>2.5</td> <td>2.6</td> <td>2.4</td> </tr> <tr> <td>全体</td> <td>2.6</td> <td>2.7</td> <td>2.5</td> </tr> </tbody> </table> <p>日文は、平均 2.5 をすべてクリアできた。目標 1 と目標 2 は前年比±0。目標 3 は前年比+0.2。国際英語は、目標 1 と目標 2 は、平均 2.5 をクリアできたが、目標 3 はクリアできなかった。目標 1 は前年比±0。目標 2 と目標 3 は前年比+0.1。人文学全体では、すべて平均 2.5 をクリアできた。目標 1 は前年比±0。目標 2 と目標 3 は、前年比+0.1。人文学部として目標数値を達成できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日文 2 年生の「キャリア・スタディ・プログラムⅡ」の到達目標達成自己評価平均値は以下の通りである。(3/31現在) 		目標 1	目標 2	目標 3	日文	2.8	2.8	2.8	英語	2.5	2.6	2.4	全体	2.6	2.7	2.5	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、「初年次セミナー」「キャリア・スタディ・プログラム」それぞれの科目のルーブリックの3つの到達目標について、自己評価がそれぞれ平均 2.5 以上獲得できた。次年度も引き続きこれを維持したい。ただし、達成度が学生の授業評価アンケート結果と連動していない科目(達成度は高いが満足度は低い科目)もあるので、満足度も上がるよう授業方法等の改善が望まれる。 ・「人文学入門」の授業評価アンケートの満足度は、「そう思う」「強くそう思う」の合計が 70%以上は、今年度は達成できた。次年度も引き続きこの状態を維持したい。 ・少人数アクティブラーニングについては、国際英語は実現できている。しかし、日本文化は諸事情により、少人数アクティブラーニングを想定した「初
	目標 1	目標 2	目標 3																	
日文	2.8	2.8	2.8																	
英語	2.5	2.6	2.4																	
全体	2.6	2.7	2.5																	

動力や実践力を修得させる。

- Benesse の「大学生基礎力レポート」調査結果において全国平均を上回る項目を増やす。

	目標 1	目標 2	目標 3
日文	2.8	2.7	2.6

2.5 をクリアできた。なお、国際英語については、分級間で達成目標が異なるので、学科全体の平均値を出していない。

- 「人文学入門」の授業評価アンケートの満足度「そう思う」「強くそう思う」の合計が 74%獲得でき、目標を達成できた。前年度 67%より満足度が 7ポイント上昇した。

- 2020 年度後期の「キャリア・スタディ・プログラム」の到達目標についての自己評価は以下の通りである。(3/31 時点)

	目標 1	目標 2	目標 3
日 I	3.38 (昨 2.95)	2.92 (昨 2.48)	3.04 (昨 2.53)
日 III	3.10	3.15	3.12
英 I	2.88 (昨 2.33)	2.65 (昨 2.25)	2.82 (昨 2.35)
英 III	2.89	2.90	2.86

いずれも、到達目標平均 2.5 以上をクリアできた。1 年後期の I は、日英ともに昨年度を上回る値となった。

- 日本文化学科については、入学者が定員を 9 名超過したため、1 クラス 25 人クラスにせざるを得なかった。専任教員数が少ないので分級数を増やすことは持ちコマ数の関係で不可能だった。
- 前期オリエンテーション時に 2 年生を対象に行った基礎レポート II の結果で、全国平均値を上回っており、なお他学科より平均値が高かったものは、以下のとおりである。ここから見えてきた学科の強みを今後の広報に活かしていきたい。

英語

(ア) プレゼンスキル役立ち度 88.1

(イ) 語学力 80.6

年次セミナー「日本を伝える英語」「キャリア・スタディ・プログラム」において、少人数教育は実現できなかった。少人数教育の実現は、個々の教員の努力では如何ともしがたく今後も望めないであろう。したがって、日本文化においては、今後は、現状を踏まえ、中人数アクティブラーニングを前提とした効果的な教室活動を考案していきたい。

- 人文学部で実施したフィールドワーク、海外研修、地域連携活動は、学生の満足度も高く、一定の成果が得られた。次年度も引き続き、この状態を維持したい。

- Benesse の「大学生基礎力レポート」の結果は、それぞれの学科が売りにしている項目については、概ね全国平均を上回る結果となった。一方、そこから外れる部分は、平均を下回るものも少なくない。学科の売りの部分の数値だけでなく、ジェネリックスキルについても、平均を上回るように努力したい。また、次年度からは、「大学生基礎力レポート」ではなく、まさにジェネリックスキルに焦点をおいた「GPS-Academic」に移行するので、こちらで高い値を得られるように努力したい。

			<p>(ウ) 些細なことでも相談できる教員がいる 68.7</p> <p>(エ) 留学支援の充実 16.4</p> <p>(オ) 歴史・伝統がある 20.9</p> <p>(カ) 女子大である 14.9</p> <p>(キ) 語学教育が充実 31.3</p> <p>(ク) キャリア支援が充実 13.4</p> <p>(ケ) 少人数教育で学びやすい 55.2</p> <p>(コ) 自分の意思をきちんと相手に伝えるようになった 80.3</p> <p>(サ) 積極的に人と関わるようになった 86.4</p> <p>(シ) 政治・経済、社会のことへ関心を持つようになった 68.2</p> <p>(ス) 英語運用力 50.7</p> <p>(セ) 大学の専門分野と進路の直結にこだわらない 37.3</p> <p>(ソ) 進路の決定や実現のためにこの 1 年で何をしたらいいかを意識している 67.2</p> <p>日文</p> <p>(ア) 情報リテラシーの役立ち度 97.6</p> <p>(イ) 文章作成力の役立ち度 95.1</p> <p>(ウ) 自宅から通える 17.1</p> <p>(エ) 議論する経験の達成 53.0</p> <p>(オ) 計画実行の達成 54.0</p> <p>(カ) 課題を設定する経験の達成 56.3</p> <p>(キ) 知的好奇心の高まり 68.9</p> <p>(ク) 自分で考えることの面白さ 82.9</p> <p>(ケ) 原因探究力 75.6</p> <p>(コ) 自分についての理解 82.9</p> <p>(サ) 社会のルールや仕組みへの理解が深まった 87.8</p> <p>(シ) 社会に対する責任を感じるようになった 85.4</p> <p>(ス) 入学後イメージがよくなった 36.6</p> <p>(セ) 日本語理解力 49.3</p> <p>(ソ) 将来どんなワークスタイルで働きたいかが明確 63.4</p> <p>(タ) 社会のことを知るために新聞やニュースを見るようにしている 61.0</p>	
--	--	--	---	--

<p>【人間生活学部】</p> <p>・「ぶれない個」を形成する教育の確立</p> <p>・「多様な価値観・生き方」を形成する教育の確立</p> <p>・「寛容と協働の精神」を育成する教育の確立</p>	<p>・ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの一体性・整合性を確保するために、教育成果の可視化に努める。</p> <p>・各学科において、実習や演習授業の充実を図ることを通して、取り組む。</p> <p>BIM(Building Information Modeling) による CAD 教育の開始 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>キャリアセンターと連携した実習ガイダンス (管理栄養学科)。</p> <p>セミナー科目における担当教員との面談 (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・学生による積極的な学会活動の推進 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)、実践教育の充実 (管理栄養学科)、実習要件授業科目の単位修得 (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・地域社会・地場企業等との協働プロジェクト(4)や、フィールドワークの実施 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>産学官連携事業の推進(管理栄養学科)。</p> <p>「子どもチャレンジ・ラボ」の各研究会への参加 (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p>	<p>・デザインコンペティションの入賞 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>資格を活かした就職割合 70%以上 (管理栄養学科)。</p> <p>セミナー担当教員による年 4 回の定期面談と臨時面談の実施 (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・総会・講演会の実施 (各 1)、チャレンジ活動報告会(中間・最終各 1)、学会誌発行(1) (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>実習報告会の実施、教職への就職者数の増加 (管理栄養学科)。</p> <p>各学年における所定の単位修得率 100% (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・4プロジェクトの実施、フィールドワーク (授業科目 3、地域連携 3) の実施(生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>産学官連携事業 1 以上の実施(管理栄養学科)。</p> <p>「こどもチャレンジラボ」参加率を学生</p>	<p>・デザインコンペティション入賞 (最優秀賞受賞 1、ファイナリスト作品ノミネート 1) (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>国家試験受験資格に必須の実習に 4 年生 75 名が履修登録し 74 名が終了。資格を活かした就職割合については、2019 年度終了後に報告 (管理栄養学科)。</p> <p>セミナー担当教員による面談を前期 2 回、後期 2 回実施。さらに課題のある学生に対して継続的な面談を実施 (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・予定通り執行 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>実習報告会 (5 回) 実施、教職 (家庭科教員) 就職者数は 3 名 (管理栄養学科)。</p> <p>4 年生 100%、他学年も 99%以上の単位修得率 (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・予定通り実施(生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>産学官連携事業 5 実施(管理栄養学科)。</p> <p>参加率 64.4% (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p>	<p>・BIM による CAD 教育は、試行錯誤の段階にあり、今後、学生の学習特性等を考慮した指導方法の改善を行う (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>実習の事前学習や実習中の行動に課題のある学生がおり、今後、継続的な指導や指導の強化を行う (管理栄養学科)。</p> <p>早期の対応が必要とされるケースもあったため、今後、授業欠席回数に注目し、学生との面談や保護者面談を実施する (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・他学年の学生間のコミュニケーション不足が課題であり、さらなる支援を行う (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>栄養教諭としての採用が無かったので、情報提供と支援を継続して行う (管理栄養学科)。</p> <p>単位修得に課題のある学生の授業出席状況について情報共有を徹底し、教員による個人面談をさらに充実させる (児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <p>・参加学生数を増やすように、学生への働きかけをさらに行う(生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。</p> <p>事前準備が学生及び教員にとって負担が大きすぎることもあり、今後は教育効果の高い事業を選択する(管理栄養学科)。</p>
---	---	--	--	--

<ul style="list-style-type: none"> ・一生涯を視野に入れた教育プログラムを構築し、自らライフキャリアを築いていくための基礎力を育成する ・2021年度の完成に向けて教育課程を着実に履行し、大学及び各学部各学科の教育目標を確実に達成 ・教育研究の質向上に絶えず努め、顕著な学習成果を達成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学科において、免許・資格取得のための支援を行う。 ガイダンスや対策講座の実施（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 海外フィールドワークの実施や、社会で活躍する先輩等との交流(管理栄養学科)。 キャリアセンターと連携し、4年生就職内定者によるガイダンスの実施(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・教育課程を着実に履行する。カリキュラム・マップに従い、各科目のシラバスにある教育目標を達成できたかを、単位取得者数、成績評価等で検討する。 ・チューターによる丁寧な学生指導、実習・演習中心の学習の推進、外部コンペティションへの出品の奨励（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 管理栄養児国家試験対策のさらなる充実(管理栄養学科)。 免許・資格取得にむけた授業科目や実習の単位修得の支援や、免許・資格を活かした就職対策の実施(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・多様な入学者に合わせた教育プログラムを立案し、実行するとともに、相談支援体制を充実させる。 ・チューターを中心に、退学者・休学者の減少に努める一方で、学生の学習意欲を向上させるよう授業の成果発表の機会を設ける（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 チューター面談の充実により、学生の学習能 	<p>の60%以上（児童教育学科/幼児教育心理学科）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職支援(20回以上)、各種ガイダンス(各1回)、対策講座(10回)の実施（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 海外フィールドワーク(1回)、交流会(3回以上)の実施(管理栄養学科)。 3年生の参加率100%(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・外部コンペティションへの出品・入賞を目指し、報告会等（3回）の実施（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 「親の意思」よりも「自分の意思」で免許を取得する学生の割合が80%以上（管理栄養学科）。 免許・資格取得者が学生の90%以上(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・退学者数・休学者数をゼロにする（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 退学者数・休学者数の減少（ゼロ目標）、管理栄養士国家試験受験資格者 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職支援(29回)ほか予定通り実施（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 交流会(6回)ほか予定通り実施(管理栄養学科)。 3年生の参加率89.2%(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・予定通り実施し、外部コンペティションにおける入賞等の成果(2)があった（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 「自分の意思」とする学生が82.7%（管理栄養学科）。 履修した科目の単位修得率は99%以上であり、90%以上の学生が免許・資格を取得見込み(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・退学者数1、休学者数3（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 退学者数5、管理栄養士国家試験受験希望者77名(94.8%)、国家試験合格率は未定（管理栄養学科）。 	<p>3年生の参加率が60%を切っていたので、学生への呼びかけの機会を増やす（児童教育学科/幼児教育心理学科）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路未定者がいるので、3年次における指導を徹底する（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 海外フィールドワーク引率教員の負担が大きく、今後、支援体制の整備を行う(管理栄養学科)。 1・2年生の参加がなかったため、今後参加を強く呼びかける(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・さらに外部コンペティションへの出品・入賞を目指して指導する（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。 学生の学習能力の低下に対応するべく、帯タイム学習、早期からの個別指導をすでに導入している（管理栄養学科）。 課題のある学生に対する継続的な支援を行う(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・健康管理センター等の学内支援機関や医療機関等の学外機関と連携をとり、チューターを中心に対応する（生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科）。
--	--	---	---	---

<ul style="list-style-type: none"> ・高大連携、高大接続の推進 ・地域連携活動の推進により、大学と地域社会とのつながりを強化する。 	<p>力の問題、心身の健康上の問題の早期発見、早期対応に努める(管理栄養学科)。 教職サポートセンターを立ち上げ、小学校教員採用対策の実施、学科教員による公立保育士試験対策講座の実施(児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高大連携活動等を実施し、入学定員の確保に努める。 ・オープンセミナーにより、高校生のデザイン能力や個性、適性を引き出すとともに、高校生に学科の特性を理解してもらうことで、学科志願者数の増加につなげる(生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。 志願者数の減少に伴う、入学者の学習能力の低下に対する、入学前プログラムにおける「化学」の家庭学習の強化(管理栄養学科)。 山陽女学園高等部「子ども教育コース」開設に合わせ、高校と学科とで授業等の連携を行う(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・地域社会との連携活動に積極的に取り組み、その成果を大学ホームページ等で公開する。 地域社会との交流を盛んにし、学生の卒業後の就職を見据え、学生が主体的に自身のライフキャリアについて考えることのできる機会を提供する。 	<p>95%以上、管理栄養士国家試験合格率100% (管理栄養学科)。 広島県及び広島市小学校教員採用試験合格率 75%以上、県内外の公立保育士採用試験合格者数 5 名以上合格(児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンセミナー受講者数 9×4 講座 (36 名) を目標 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。 入学前プログラムの家庭学習の強化(管理栄養学科)。 2021 年度山陽女学園高等部「子ども教育コース」完成に向けた授業実施計画の立案と実施(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・毎月 1 回以上、ホームページを含む 2 媒体以上で地域連携活動の成果を報告する。 	<p>広島県及び広島市小学校教員採用試験合格率 66.7% (受験者数 9、合格者数 6)、県内外の公立保育士採用試験合格者数 4(児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンセミナー受講者数 63 (生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。 入学前プログラムの実施(管理栄養学科)。 前期大学授業見学・ガイダンス 1、模擬授業 1、後期幼稚園参観 1 実施(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・目標数値を達成。 	<p>退学者数の増加について、1 年次から授業欠席の多さとの関連があることから、学科内での情報共有と早期の対応をする (管理栄養学科)。 小学校教員採用 2 次試験における 2 名の不合格者について、面接対策が不十分であったことから、指導を強化する(児童教育学科/幼児教育心理学科)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンセミナーによる学科の学びの特徴について広報する(生活デザイン学科/生活デザイン・建築学科)。 入学者の学習能力の向上を目指した取り組みが必要(管理栄養学科)。 高校との綿密な協議によりさらなる連携を図る(児童教育学科/幼児教育心理学科)。 ・3 学科共に多くの地域連携活動に取り組み、新聞やテレビ等で取り上げられることも多く、地域社会とのつながりはさらに強化された。高校生に向けた魅力的な発信であったかについて見直し、さらに各学科の魅力が高校生に伝わりやすいようにしたい。
<p>【共通教育部門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぶれない個」を形成する教育の確立 ・「多様な価値観・生き方」を形成する教育の確立 ・「寛容と協働の精神」を育成する教育の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ぶれない個」「多様な価値観・生き方」「寛容と共同の精神」の形成を意識した授業内容にするため、シラバスの見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共通教育部門会議において、シラバスの点検を行い必要に応じて改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎科目について前・後期にそれぞれ中間・最終報告を行った。各報告時に課題となった授業内容・運営等改善にあたった。シラバスの変更までの必要性はなかったが、授業運営上の課題を整理できた。 	<p>(課題) 基礎科目における DP 達成に対する位置づけが不明確 (対応) 部門会議において、基礎科目によって得られる力を整理する</p>

<p>・一生涯を視野に入れた教育プログラムを構築し、自らライフキャリアを築いていくための基礎力を育成する</p> <p>・2021年度の完成に向けて教育課程を着実に履行し、大学及び各学部各学科の教育目標を確実に達成</p>	<p>・基礎科目、担当するライフキャリア科目について、授業評価を行い、学生への教育内容の改善・構築に努める。</p> <p>・「女性とライフキャリア」において、アクティブ・ラーニングや学科を超えたグループ編成による教育を実施することで、より広い視点を持って考える力を育成する。</p> <p>・「女性とライフキャリア」と「キャリアプランニング」やその他ライフキャリア科目群との連動を検討する。</p> <p>・「キリスト教の時間」がキリスト教学入門Ⅰ・Ⅱの予習・復習の位置づけにあることを明記し単位の実質化を図る。</p> <p>・「キリスト教の時間」招聘講師の講話について、基礎科目やライフキャリア科目で教材として取り上げる。</p> <p>・基礎科目、ライフキャリア科目の課題抽出や改善のための会議を行う。</p> <p>・各科目の不合格・失格者を減らすため、出席状況や履修状況で問題のある学生を学科や教務課と共有する。</p> <p>・自己評価アンケートの結果を分析する。</p> <p>・授業内容の発表の場を検討する。</p>	<p>・基礎科目、担当するライフキャリア科目について、学生の学修状況、課題等について科目担当者が授業評価を行う。その結果から課題を抽出し、学務委員会を介して各学科と連携を図る。</p> <p>・学生による自己評価、毎回の授業達成状況や授業評価アンケートから評価する。</p> <p>・科目担当者を中心に見直しを行う。</p> <p>・「キリスト教の時間」の出席率を上げる(宗教委員会事業計画参照)。</p> <p>・共通教育部門会議において、学期毎に、関連できる科目・授業内容を確認する。さらに、学務委員会を介して、学期毎に教育内容を提示し、関連できる科目・授業内容の有無を確認する。</p> <p>・基礎科目、担当するライフキャリア科目の課題抽出、改善を検討する会議を、各学期2回開催する。</p> <p>・授業への取り組み意欲や修得状況の把握を行い、学務委員会を介して学科等と情報共有を行う。また、課題のある学生の早期把握につながる仕組みを構築する。</p> <p>・各科目の学生による自己評価の平均点が2点以上を目指す。</p> <p>・1科目以上の実施を目指す。</p>	<p>・上記のとおり前・後期科目(後期の最終報告は2月27日学務委員会時)については振り返りを行い、学務委員会を介して学科と連携をとった。</p> <p>・「女性とライフキャリア」について、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業内容や運営について、学生の提出課題・態度・授業評価等により確認し、概ね良好と評価した。</p> <p>・「女性とライフキャリア」は春季宗教強調週間と連携を持てた。今後、各科目担当者間で連携の可能性を検討する。</p> <p>・宗教委員会事業計画参照</p> <p>・2019年9月24日学務委員会の席で、共通教育部門から後期「キリスト教の時間」を授業に活用してほしい旨依頼したが、実施できなかった。</p> <p>・前述のとおり、前期・後期に各2回実施し、課題抽出を行った。</p> <p>・基礎科目について、履修状況に課題がある学生については、学務委員会を介して学科と情報共有を行った。</p> <p>・基礎科目の再履修学生に対して2020年度から補講を実施するよう整備した。</p> <p>・前期基礎科目67クラス中55クラス(82%)が2点以上であった。(後期についてはまだデータが公示されていないため分析不可)</p> <p>・「児童サービス論」において、大学図書館3階にある「絵本の部屋」のディスプレイの展示制作を行い、図書館の展示に関わる創造性の演出</p>	<p>(課題) なし (対応) 今後も引き続き学務委員会を通して学科と連携する</p> <p>(課題) 担当するライフキャリア科目の授業内容の振り返りについて部門内での共有ができていない (対応) 部門会議で振り返りを行う</p> <p>(課題) 「キリスト教の時間」の内容を他の授業の教材に取り上げられなかった。 (対応) ゼミのレポートなど具体的に取り入れができると想定される科目について担当者に積極的に依頼をする。</p> <p>(課題) 前述の通り、基礎科目、担当するライフキャリア科目の振り返りが十分できていない。 (対応) 部門会議で検討を行う</p>
---	---	---	---	--

<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究の質向上に絶えず努め、顕著な学習成果を達成する ・ライフキャリア構築をめざすキャリア教育の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・各科目でアクティブ・ラーニングを実施する。 ・授業評価アンケートにおける複数の評価指標を用い、課題の抽出、改善の検討を行う。 ・「ヒロシマと平和」の教育方法を充実させ、より深い学びを実現し受講者のうちに歴史と未来を担って生きる視点を形成させる。 ・「ヒロシマと平和」、「インターンシップ」は学科と連携を図り、履修する学生を増やす。 ・「ライフキャリア特別セミナー」の開講を検討する。 ・「Human Rights in the World」においてSDGsを意識したグローバルなキャリア形成意識へと学生を誘導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各科目でアクティブ・ラーニングが実施されているか確認する。 ・授業評価アンケートの複数の評価において、全学平均を下回る評価の科目数を減らす。 ・多様なリソースを活用し、座学・グループワーク・フィールドワーク・プレゼンテーションを複合した課題発見型アクティブ・ラーニングを実施する。 ・「ヒロシマと平和」、「インターンシップ」の履修学生数を前年度並みあるいは増を目指す。 ・「ライフキャリア特別セミナー」として1科目以上の開講を目指す。 ・開発教育型のワークショップを複数とり入れて実施する。 	<p>を試みた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・司書課程の学生を中心に大学図書館と協力してHiroshima Active libraryの協働事業のために資料の選定やPOP作りを行った（12月に大学図書館にて実施）。 ・各共通科目、女性とライフキャリアにおいて、AL形式を積極的に取り入れた。 ・担当科目は概ね全体評価と同じ。評価の低い科目があったが、学生の成績は他のクラスより優秀であり、学生からのコメントもなかったため今後の検討課題とした。 ・「ヒロシマと平和」は関西学院大学ハンズオン・ラーニングセンターおよび本学教務課の支援を受け、また、部分的に宗教センター主催の「8.6平和学習プログラム」と合同することによってリソースの拡充をはかった。学外講師による講義も他に代えがたい内容であり、受講者の関心も高かった。最終のプレゼンテーションはいずれも課題の設定、考察、取り組みなどの点で極めて水準の高いものであり、目標を達成したと判断する。 ・「ヒロシマと平和」の受講者は本学6名と、昨年より倍増。 ・今年度は開講できなかった。 ・Human Rights in the Worldでは開発教育協会（DEAR）のワークショップ教材（複数）を用い、G Suite for Educationを活用した双方向コミュニケーションによりアクティブ・ラーニングを実施した。 	<p>(課題) なし (対応) 引き続き同様の評価を行う。</p> <p>(課題) なし</p>
<p>【言語文化研究科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぶれない個」を形成する教育の確立 ・「多様な価値観・生き方」を形成する教育の確立 ・「寛容と協働の精神」を育成する教育の 	<ul style="list-style-type: none"> ・人文学部と言語文化研究科のAP、CP、DPを関連付けて、体系的な観点からオリエンテーション、授業、個別指導において必要に応じて明示的に扱う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各チューターが『大学院要覧』の該当箇所を示して具体的に指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実施済み。 	

<p>確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一生涯を視野に入れた教育プログラムを構築し、自らライフキャリアを築いていくための基礎力を育成する ・教育研究の質向上に絶えず努め、顕著な学習成果を達成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・修士課程修了後の進路や将来構想について早い段階から意識を深めさせて、教員採用試験、他大学大学院博士後期課程への進学、一般企業への就職など、具体的なプランの検討を開始させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各チューターが『大学院要覧』の該当箇所を示して具体的に指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実施済み。 	
<p>【人間生活学研究科】</p> <p>2018年度大学基準協会認証評価（第3期）において<適合>という喜ばしい結果を得たものの、大学基準協会とのやりとりの間に浮かび上がってきた諸課題もあり、それらに関しても以降右に明記し2019年度にさらなる改善へ向け動くことになる。</p> <p>本研究科は、生活文化学専攻と生活科学専攻により内部構成されており、生活文化学専攻には生活経営、生活文化、生活造形という専門群を、生活科学専攻には健康形成、健康管理、生活環境、地球環境という専門群を擁し、両専攻とも、教育職員免許状〔専修免許状：家庭〕の課程を有し、一級建築士受験資格の実務経験認定のプログラムを有する。こうした内容保持の根は4年制の本学学部の人間生活学部であり、今後とも人間生活学部との接続の意義はプラス理解したい。したがって、原則的には、今後はさらに、本研究科修学者には学部修学4年を経て（その後になんらかのキャリアを経た場合も）プラス修士課程2年を加えるごとき6年制的イメージを抱けるよう、学部とのつよい連動メリットを顕在的に意識させる（このことは本研究科の定員以上確保を目指す募集活動の取り組みのひとつともなる）べく具体策企図する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぶれない個」を形成する教育の確立 ・「多様な価値観・生き方」を形成する教育の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ・この私とこの世界とがともに善きものとなっていくことを目指す「ぶれない個」を形成する教育、「多様な価値観・生き方」を形成す 	<ul style="list-style-type: none"> ・本研究科教育を求め要請する需要が生まれるべく、2専攻内の諸専門群、専修免許状の課程、一級建築士受験資格の実務 	<ul style="list-style-type: none"> ・<大学院学則1条の2にある理念・目的の箇所に、2018年度改組後の各学部のDPの柱となる「ぶれない個」「多様性」「寛容と協働」の資質 	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度内前半で本研究科委員会において数値目標とともに<2018年度改組と連動する大学院学則の改正>と

<p>・「寛容と協働の精神」を育成する教育の確立</p>	<p>る教育、「寛容と協働の精神」を育成する教育の確立のため、(とぼしい数の院生しかない現状において)より具体的な手段として、本教育の確立を予定できる容器(教員とカリキュラム等)の前提的整えを2018年度の当集中的整えを受けつつさらに徹底する。</p>	<p>経験認定プログラム、それぞれが学部ときちんと連動しつつ容器として整っているかをさらに点検、年度内の不備改善、これまで以上の充実化の新たな方向等提案すべく、年度間研究科委員会(計約10回程度)において<少なくとも3回、上記案件議題上程>する。そのなかには、大学基準協会とのやりとりの間に浮かび上がってきた大学院学則1条の2にある理念・目的の箇所、2018年度改組後の各学部のDPの柱となる「ぶれない個」「多様性」「寛容と協働」の資質をふまえるかたちでの修正について>を研究科委員会等に上程し年度内決定することも含む。</p>	<p>をふまえるかたちでの修正について>の案を、2019年4月1日開催の2019年度第1回人間生活学研究科委員会において上程(1回目)し、次回へ継続審議。4月17日開催の2019年度第2回同研究科委員会に改善案を上程(2回目)し、審議の結果、当案をさらに改めて当研究科委員会としての案決定し、大学評議会へ上程することに。5月7日開催の2019年度第2回大学評議会にて「広島女学院大学大学院学則第1条の改正(案)について」と題して上程(大学評議会上程1回目)、審議の結果、次回へ継続審議。5月15日開催の2019年度第3回人間生活学研究科委員会へ、大学評議会の審議内容をもとに、再度の改善案を上程(3回目)し、審議の結果、当該案により決定するとともに再度、大学評議会へ上程することに。6月4日開催の2019年度第3回大学評議会にて再び「広島女学院大学大学院学則第1条の改正(案)について」と題して上程(大学評議会上程2回目)し、審議の結果、上程案のままにて決定できる。本件に関しては目標達成。</p>	<p>いう目標も達成できた。これにより、大学基準協会とのやりとりの間に浮かび上がってきた課題の解決は遂行できた。今後とも、本学外からの指摘にもとづくだけでなく、自己点検をもとにこうした方面でも継続的改善に努めなければならない。</p>
<p>・一生涯を視野に入れた教育プログラムを構築し、自らライフキャリアを築いていくための基礎力を育成する(1999年4月に本研究科(生活文化学専攻、生活科学専攻)は開設し、自らライフキャリアを築いていくための力をつけようとする院生を育成し始めた。初期の院生の多くが学外で専任で働きながら同時に大学院で学ぶ者たちであった。2019年4月は研究科開設20周年にあたる。その記念すべき2019年度は、本研究科へそうした進学者を導き、その翌年度2020年度に本研究科進学者を1年度定員に限りなく近づける。)</p>	<p>・大学院という制度は、一生涯を視野に入れた教育プログラムの有効な一存在として具体的に機能しており、本研究科はもちろんそうであり、すでに最低限以上には組織構築されていて、すでに最低限の育成準備できているにもかかわらず、本学の学部卒業見込み学生や卒業生等においてさえ、本研究科進学の際にもこの件について突っ込んだやりとりがあったが、近年の学部学生の就職率の高まりとまさに反比例するように大学院への進学者は激減してきた。2018年度以上にまずは本学の学部在学学生及び卒業見込み学生や卒業生に本研究科説明会に参加してもらえよう、パンフレット配布や教員推薦等を強化するとともに、大学院進学の特典を今後ともさらに学部生と社会人等に様々な手段でア</p>	<p>・学部構成教員の一部が大学院構成教員であり、2018年度は学部改組開始年度であったゆえ、2018年度大学院への大幅な注力は抑制せざるをえなかった。2019年度もなお同様であるが、定員(生活文化学専攻6名、生活科学専攻6名)の確保へ向け、2019年度も翌年度進学において、まずは<各専攻1名以上の進学者確保>する。</p>	<p>・秋季入試(2019年10月5日実施)においては入学者は得られなかったが、春季入試(2020年3月3日実施)においては生活文化学専攻へ2名の進学者が確保でき(このうち1名は社会人特別入試)、<各専攻1名以上の進学者確保>という今年度目標は、生活文化学専攻においては達成できた。ただし生活科学専攻においては、進学者0名であり、目標達成できない。</p>	<p>・次年度2020年度は生活文化学専攻計3名、生活科学専攻計1名の在籍見込みで、今年度との比較で本研究科在籍院生数プラス2名増えることになりそうであるが、次年度は生活科学専攻についての進学メリットをさらにアピールする必要がある。</p>

<p>・教育研究の質向上に絶えず努め、顕著な学習成果を達成する</p>	<p>ピールする。(2019年度在籍者は生活文化学専攻1名(本年4月復学見込)、生活科学専攻1名(社会人特別入試により本年4月入学)の計2名で、2018年度よりも1名増加する。)</p> <p>・顕著な学習成果を達成させるため、教育研究の質向上を目指すうえで、前提として、教員組織地盤固めが必須であるが、本研究科にあっては、2017年度に開始した教員審査を2018年度中に継続して進め、いったん完了したが、不備が生まれないよう引き続き注意し、必要ならば教員審査等を再開する。</p> <p>・大学基準協会による大学院として、固有のFDが行なわれていないため、適切にこれを実施するよう改善が求められる>という提言・指摘があることを受け、2018年10月17日開催の全学にわたるFD委員会(以下「FD委員会」)において、「大学院等の今後のFD研修会の実施について」という議題にて、本件にかかわる審議がなされた。これにもとづき2019年度は本件にかかわる諸改善に取り組む。</p> <p>・人間生活学研究科のDP・CP・APはくり返し改善の余地を残しているとの方針にもとづきこの検討に取り組む。</p>	<p>・2017年度には設置基準上最低限必要な程度の(「〇合」、「合」、「可」)審査に留め、2018年度にはそれ以上の審査を、希望する全教員について完遂できたが、本2019年度は来たる2020年度を見据え、なお「〇合」等教員数の現在以上数の充実が必要な場合、当該教員にかかわる審査を行なう。</p> <p>・大学院として固有のFD研修会を年度内1回以上開催する。</p> <p>・研究科委員会で大学院として固有のFDに関する素案を作成し、FD委員会へ1回以上上程することで、決定案へ近づける。</p> <p>・人間生活学研究科運営委員の間でまず本研究科のDP・CP・APに改善点が見出される際には、本研究科委員会においてその件を1回以上審議し、審議次第では改正決定する。</p>	<p>・第7回人間生活学研究科委員会において「人間生活学研究科大学院修士課程担当教員に関する任用内規」にもとづき2020年度就任予定教員の教員審査審議を実施し、(今年度2019年度末までは徳島大学教授である)特別任用教授野間隆文氏を研究指導教員(〇合教員)と決定する。これをもって目標達成した。</p> <p>・大学院固有のFD研修会を今年度2019年9月25日に実施決定し、目標達成した。</p> <p>・2019年度に入り、すでに1回上程しており、目標達成した。</p> <p>・この件については2020年2月15日開催の人間生活学研究科運営委員会で検討し、本研究科DP・CP・APについては今年度はとくに改善を施す点は見出されなかった。この意味で目標達成したが、次年度以降本件継続検討することに決する。</p>	<p>・次年度2020年度も本件は同様に検討する。</p>
<p>【キリスト教教育】</p> <p>・「ぶれない個」を形成するキリスト教教育の確立</p> <p>○建学の精神の共有</p> <p>・「キリスト教の時間」と「木曜日チャペル」について、建学の精神との対峙を通して「ぶれない個」を確立するための場であるという位置付けをより明確にし、全学の学生および教職員に共有を求める。多様な講師の多様な生き方に出合うこと</p>	<p>1. 「キリスト教の時間」の充実</p> <p>1) 提供内容の充実</p> <p>宗教委員会において精選した講師の招聘。</p> <p>①聖書が内包する豊かなメッセージを、学生の現状・ニーズに合わせて語って下さる牧師・キリスト者など。</p> <p>②平和・人権・国際・女性に関する諸活動において、顕著な働きをしておられる様々な方。</p> <p>③上記に関してとくに、社会的に広く意義が</p>	<p>・「キリスト教の時間」への一年生の出席率アップ</p> <p>2018年度平均80.8%⇒2019年度目標84%</p> <p>・「キリスト教の時間」への教職員の出席率アップ</p>	<p>前期は学科・部門選出の宗教委員のご尽力のもと、全学的な理解と協力を得て、下記の成果につながり、また、いくつかの課題も明らかになった。</p> <p>・「キリスト教の時間」への一年生の出席率は、85.5%であり、目標を上回ることができた。途中で出席率が落ちた回もあったが、丁寧な説明に学生がよく応えてくれて持ち直した。</p> <p>・教職員の出席数は平均11.5名であり、昨年度を下回り目標にはやや未達である。前期宗教強調</p>	<p>・「キリスト教の時間」への一年生の出席率は、年度としては目標を達成できたが、前期89.0%に対し、後期は82.2%と落ち込んだ。日程など複数の要因によるものと思われるが、詳しく分析し、対策を行いたい。</p>

<p>で、「多様な価値観・生き方」や「寛容と協働の精神」についても学びつつ、これらの講師に通底する、人生や人類普遍の価値に対する誠実さに触れることによって「ぶれない個」の涵養を目指す。</p>	<p>認められる活動をしておられる卒業生。上記3項目にあてはまる講師を多様に幅広く迎えるほか、各学期に学生による発表の場を設ける。</p> <p>2) マナー教育</p> <p>①「聴く」姿勢づくり、初年次からの本学らしいマナー教育の場とする。また、傾聴を通しての人格形成および多様で豊かなキャリア観形成の場とする。</p> <p>②丁寧な説明に基づく納得感を伴った、私語と居眠りの根絶。</p> <p>3) 学内広報</p> <p>①学生に対しては「チャペルだより」配布と、「キリスト教学入門」その他の授業での活用。教職員に対しては大学評議会や事務協議会を通してのプログラムの位置付けの説明。</p> <p>②学生の多様なアイデアに基づく広報の展開。なかでも2016年度以来生活デザイン建築学科・生活デザイン学科のご協力を得て行われたポスター掲示を継続する。</p> <p>③上記を通し、学生と教職員により幅広い理解と協力を求める。</p> <p>4) 共通教育部門を通じた、全学共通科目との連携。</p> <p>2. 「木曜日チャペル」のさらなる充実</p>	<p>2018年度平均12.5名⇒2018年度目標14名</p> <ul style="list-style-type: none"> 各期にボランティア発表会（2019年前期は管理栄養学科海外フィールドワークとカンボジア・スタディツアー発表）、後期に児童教育学科1年生による「こどもさんびか」発表会を実施。 「キリスト教学入門」との連携（予習・復習としての位置づけを従来どおりシラバスに明記するとともに、それに加えて授業内での参加呼びかけを強化）。 コメントカードの活用（意見収集と丁寧な応答）による、当事者意識の涵養→毎週配布するプリントに応答を掲載。 チャペルだより年3回発行。 宗教センターハンドブック発行（新入生に配布）。 リーフレット作成。 毎週のポスター掲示（チャペル、ヒノハラホール等）。 「女性とライフキャリア」と前期宗教強調週間特別講演会（講師：院長・学長 湊晶子先生）との連携。 	<p>週間に多数（27名）の出席をいただいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 障がい学生支援室による講話の字幕化は当該学生のみならず他の出席学生にとっても多様性の理解と共生への指向を共有する機会となった。 前期は計画どおり、管理栄養学科海外フィールドワークとカンボジア・スタディツアー発表を実施し、出席学生からは高い関心が寄せられた。 シラバスや授業での説明を通して、連携の趣旨を受講学生に丁寧に伝えた。参加のモチベーションを高めるうえで有効であった。出席率やレポート提出数の向上につなげるために、さらなる呼びかけが必要と考えられる。 コメントカードを通じた講演へのフィードバックは講師からも好評である。また、学生からの意見に基づいて内容や環境などの改善にもつながった。 集合時間、受講姿勢は昨年度に比べ非常に良好であるが、私語の根絶には至っていないため、続けて呼びかけを行いたい。 チャペルだよりの発行を3回行った。ハンドブック、リーフレットも学生や保護者に配布して活用した。 ポスター掲示を行った。効果については今後検証の必要がある。 湊晶子院長・学長先生の講演は、学生たちはもとより、教職員や一般参加者にも非常に好評であった。科目との連携も有効であった（共通教育部門の報告を参照）。詳細は学院報参照。 	<ul style="list-style-type: none"> 建学の精神の共有の場として、教職員の率先した参加をお願いしたい。教職員の姿勢が、学生の出席姿勢の向上につながり、結果としてプログラムのコストパフォーマンスの向上にもつながることが見通される。 講堂の環境については学生からの意見に応答して改善を続けた。参加意識の向上にもつながったので、取り組みを継続したい。 チャペルだよりの活用状況について、検証と評価が必要と考えられる。方法について宗教委員会で検討する。 ポスターの活用状況について、検証と評価が必要と考えられる。方法について宗教委員会で検討する。 「女性とライフキャリア」との連携は有効であった。次年度も継続とし、講師選定の際に考慮に入れる。
--	---	--	---	--

<p>・「キリスト教学入門」やライフキャリア科目のキリスト教関連科目においては、単なる教義やキリスト教思想の紹介にとどまらず、歴史や、具体的な現実社会の諸課題においてキリスト教が果たした功罪を学び、自らに引き寄せて考えるよう促すアクティブ・ラーニングを実践することにより、一人ひとりの学生が、キリスト教的価値観との対話の中で、「ぶれない個」を見出すとともに、「多様な価値観・生き方」や「寛容と協働の精神」を涵養するよう導く。</p> <p>・宗教センターにおける多様な活動をさらに広げ、上記の目標をより効果的に達成するための支援とする。</p>	<p>・従来どおり教職員・学生による多様な発表の場であることは維持しつつ、発表者には発表内容と聖書やキリスト教とのかかわりについて触れていただくことによって、学校礼拝としての位置づけをより明確にすることを指す。</p> <p>・「木曜日チャペル」の学内での位置付けの明確化</p> <p>・2016～2017年度も行ったポスター掲示による宣伝をさらに充実させる。</p> <p>3. 授業における展開</p> <p>キリスト教関連の授業を通して、常に学生が「ぶれない個」の形成というテーマに触れる機会をつくる。</p> <p>1) 全学必修科目「キリスト教学入門Ⅰ・Ⅱ」の授業改善</p> <p>2) ライフキャリア科目におけるキリスト教関連科目の内容充実</p> <p>4. 宗教センター活動の拡充</p> <p>1) 従来行ってきた「8.6 平和学習プログラム」、「ピーススタディツアー」、「聖歌隊」などの活動を継続し、「ぶれない個」の形成を意識したプログラムとして再定義する。</p>	<p>・「木曜日チャペル」への学生の出席率アップ 2018年度平均 31.5名⇒2019年度目標 32名</p> <p>・「木曜日チャペル」への教職員の出席率アップ 2018年度平均 15名⇒2019年度目標 16名</p> <p>・院長・学長による講話担当。</p> <p>・各学科教員による講話担当。</p> <p>・職員による講話担当（輪番制の継続）</p> <p>・学生による講話担当。</p> <p>・広島女学院史（自校教育）の要素を拡充、アクティブ・ラーニングによる学修を目指す。</p> <p>・8/5-7に「8.6 平和学習プログラム」を実施。</p>	<p>・講話担当者とコミュニケーションをとり、聖句を選んでいただいたり、演題に即した聖句を大学宗教委員長が選んだりした。</p> <p>・「木曜日チャペル」への学生の出席数は24名であり、昨年を大きく下回り、目標には未達である。</p> <p>・「木曜日チャペル」への教職員の出席数は17名であり、目標を上回ることができた。</p> <p>・湊院長・学長の講話は出席者も多く、好評であった。</p> <p>・教員の担当回に、所属学科の学生や同僚の姿が多く見られた。他学科・部門の学びを知る上でも有効であった。</p> <p>・職員の担当回には、同僚の姿が多く見られた。各部門の働きや熱意や問題意識を全学的に共有するうえで有効であった。</p> <p>・学生の担当回は、留学体験記、YMCA フィリピンワークキャンプ報告（特別チャペル）、ピーススタディツアー長崎報告、原爆詩朗読、学生オルガニストコンサート、卒業年度学生の発表など優れた内容ばかりで、友人関係からの出席者増にもつながった。</p> <p>・自校教育の要素を拡充し、回数を増やしたことには、自身が学ぶ学校の歴史を知り、伝統に誇りを持つことができるようになった、など学生の良い反応があった。</p> <p>・統一シラバスに則りつつ、学生の所属学科の専門領域に寄り添った内容を展開している。</p> <p>・アクティブ・ラーニングについては授業形態、人数、教室などの制約も多いが、部分的に取り入れ、拡充を目指している。コメントカードの活用はとくに有効と思われる。</p> <p>・今年度の「8.6 平和学習プログラム」には、8大学より26名の参加と本学学生スタッフ10名の参加があり、充実した学習を行った。詳細はチャペルだより参照。</p>	<p>・学生の出席数が減った原因について分析を進め、対策を行いたい。</p> <p>・教職員の堅調なご参加をいただいて感謝である。分析は左欄下記参照。</p>
--	---	--	---	---

	<p>2) カルト対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カルトおよびその対策に関する情報収集を強化する。 ・学生および教職員への有効な情報提供を行う。 ・他大学との連携で本学がリード役を担う。従来どおり、「キリスト教の時間」に専門家を講師として招聘し、同日に他大学の担当者に呼びかけ、カルト対策のための情報交換会を開催する。 <p>3) 学生チャペル委員活動のさらなる活性化</p> <p>5. 効果の検証</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記の取り組みについて、2018年度は、2017年度に試行したアンケート調査を1年生の「キリスト教入門」全クラスに取り入れ、ルーブリック評価と連携させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年2月or3月に、福山または山口エリアを目的地に「ピーススタディツアー」を実施。 ・諸行事や演奏活動に向けて聖歌隊の活性化。 ・講演会と情報交換会を2019年5月9日(火)に実施予定。 ・「おにぎりアクション」等の継続(宗教センターによる支援)。 ・授業内での実施(シラバスに明記)。 ・分析結果の公表。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ピーススタディツアー」は3/7-8にクワイヤキャラバンを兼ね岩国地区で実施(学生17名参加)予定だったがCOVID-19対応のため中止。 ・聖歌隊は現在17名で、主に入学式、宗教強調週間特別講演会、オープンキャンパス、メサイヤなどで演奏を披露、好評をいただいた。 ・5月14日(火)に、中部学院宗教総主事、高木総平先生をお招きし、「キリスト教の時間」における講演の後、他大学の教職員や行政ならびに警察の担当者も参加して情報交換会を行い、有意義な意見と情報の交換が行われた。 ・おにぎりアクションは学生主体の活動として実施し、意義深い活動として定着しつつある。内容や時期については検証と改善を進める。 ・アンケート調査は4月と1月に行い、集計結果宗教委員会および共通教育部門で報告した。「キリスト教の時間」ならびに「キリスト教入門I・II」の授業を通じ、キリスト教への親しみが増す一方で、教義を押し付けることなく、「ぶれない個」の確立ならびに、多様性の理解や、寛容と協働の精神の涵養といった教育目標が高い水準で達成されたことが結果に表れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度催行を検討。 ・年度末調査の回答率が低かったため、実施方法を改善する必要がある。2018年度より開始したアンケート調査は2020年度までとし、調査結果と分析を何らかのかたちで公開したい。
<p>【教育課程・教育成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習成果を可視化するための指標(ルーブリック評価の達成度等)を設けて教育の達成度を常時モニターする ・成績評価の厳格化への取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が個々に作成する科目ルーブリックの評価観点や評価(Learning Effort)の文言が指標として適切であるか検証する。 ・2018年度の科目別・教員別・学科別G P分布図を作成し、過去のデータと比較する。 ・CAP制等の基準であるGPA2.3が基準とし 	<ul style="list-style-type: none"> ・FD委員会等と連携し、ルーブリック評価観点や評価の検討についての研修会を開く。 ・学務委員会等においてGPAのデータ分析、成績評価の在り方を検討する会議を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年8月7日(水)14:00~15:30 FD委員会と共同でFD研修会を実施した。「成績評価とルーブリックの連動〜カリキュラムマネジメントの確立に向けて〜」 ・2019年6月25日(火)学務委員会 内部質保証委員会報告として、「2018年度自己点検・評価報告」から出た課題を報告した。 	<p>(課題) FD研修会では改善に対する気づきまでは行ったが、すべての科目に対する修正につながっていないと思われる。</p> <p>(対応) FD委員会と連携して、各科目の整理が完成するために研修会を実施する。</p> <p>(課題) 成績評価の現状は把握できているが、どう改善すべきかの方針が立てられていない。</p>

<p>・ライフキャリア構築をめざすキャリア教育の実施</p>	<p>て機能するように、成績評価のあり方を検討する。</p> <p>・3つのポリシーやカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの見直しを行う。</p> <p>・学務委員会を通じて、ライフキャリア構築への教育の実現に向け、カリキュラム・マップ等を踏まえた振り返りを行う。</p>	<p>・3つのポリシーやカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの検討を学科毎に1回以上行い、学務委員会において情報共有を行う。</p>	<p>①カリキュラムマップとDP・CPとの関係性の検証 ②成績不振学生への組織的対応 ③単位の実質化、GPA2.3の問題点 上記について、学務委員会、FD研修会で取り組む。</p> <p>・2019年7月30日(火)学務委員会 2018年度GPA分布図(学年別・学科別)を提示。学科に持ち帰り、成績評価のあり方について検討するように指示。</p> <p>・2020年1月7日(火)FD研修会において、今後教務上重要となると想定されることの整理を行った。その中で、成績評価の厳格化についても言及した。</p> <p>・2019年9月17日(火)13:00~14:30 FD委員会と共同でFD研修会を実施した。「DP達成に向けたカリキュラムを機能させるためのアセスメント~カリキュラムマネジメントの確立に向けて~」</p>	<p>(対応)他大学の情報を収集して、本学の方針案を決める。</p> <p>(課題)FD研修会で整理が進められているが、完成には至っていない。 (対応)FD委員会と連携し、3つのポリシーと科目の関係を整理する。</p>
<p>【学生募集・入試制度】</p> <p>・広報活動を充実させて、広島女学院大学ブランドを確立していく。</p> <p>・入試制度の改革</p>	<p>・2018年度の改組に引き続き、ブランディング計画の策定として、「リベラルアーツ教育」、「グローバル教育」、「キャリア教育」や「ライフキャリア」、「エンパワーメント」などの具体的な特長を全学あるいは各学科の実践的な事例から把握し分析する。</p> <p>・2020年度に向けて、2019年度の入試制度の見直しに加え、2021年度からの入試制度を検討していく。</p>	<p>・オープンキャンパスの広報や前半型入試(AO型入試・推薦入試)への出願を促し、前年の数字を上回ることができるようなPRを行なっていく。(詳細は未定であるが、継続的に内容を検討していく。)</p> <p>・この件に関しては現在入試委員会で検討中であるが、2020年度においては、2019年度をベースにした見直しになり、2021年度においては、入試スケジュールの調整、入試科目や入試問題の検討、大学共通テストの利用方法、調査書の扱いなどが主な論点となる。(6月の高校教員対象の説明会にはある程度の方針をかためていく。)</p>	<p>・夏のオープンキャンパスにおいては、本年度は計5回開催することができて、高校生822名(前年度は計4回で686名)を迎えることができた。2021年度入試も控え、高校1~2年生の割合も増加の傾向となった。進研模試のデータやOS・AO入試の動向から、国際英語学科や児童教育学科を中心に、推薦入試への広報を強化することとなった。</p> <p>・2021年度入試に関して、6月の高校教員対象入試説明会で現行と改定案の比較を示し、9月27日付で、「2021年度広島女学院大学入学者選抜について(予告)第2報」をホームページのニュースに掲載して、総合型選抜・学校推薦型選抜・一般選抜の区分、共通テストの扱いや英語成績提供システムの活用などの詳細を公表した。引き続き、各入試形態における詳細を検討していく予定である。</p>	<p>・春のオープンキャンパスでは、次年度の新入試に向けて、その概略を紹介し、特に総合型選抜(オープンセミナー型入試・活動評価型入試)について強調し広報していく。この中でも、国際英語学科や児童教育学科ではオープンセミナーのコースを増やすこととした。</p> <p>・2021年度入試に関しては引き続き11月15日付で、「2021年度広島女学院大学入学者選抜について(予告)第3報」までホームページのニュースに掲載し、その詳細を公表した。各入試形態のさらなる詳細は現在入試委員会で継続審議中であり、新年度4月までに決定し、5月から入試ガイドを配布できるよう準備中である。</p>
<p>【広報活動】</p> <p>・広報体制の強化</p>	<p>・HPコンテンツの整理・充実</p>	<p>・学科紹介動画、サロン・ド・ミナト等、</p>	<p>・ホームページ全面リニューアルから3年目にあ</p>	<p>・ホームページビュー数は前年比同</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・HP への導線強化 ・開学 70 周年事業関連の広報 ・研修会等に参加し職務能力向上を図る。 ・広告から教育実践の情報公開に向け発信力の向上 	<p>現有コンテンツの整理・充実の他、進学サイトの取材記事を大学 HP に二次利用する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WEB 広告、LINE チャットボットを活用し、アクセスの増加を図る。 ・新聞広告を予定 ・学外のセミナー等を利用し、広報担当者の職務能力資する研修への参加を検討する。 ・各学科からは地域連携事業、授業、ゼミ、海外研修など情報発信を推進し、SNS でも連動配信する。 	<p>たりコンテンツの見直し、整理を実施。上半期は入試情報を再編成し、5 月末に公開した。下半期はページタイトル等の整備を実施。卒業生取材記事の追加更新を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WEB 広告はオープンキャンパス、出願受付告知のタイミングで実施。新たに動画バナー広告も配信し訴求力を高めた。LINE チャットボットを設置し、ホームページの各コンテンツへの誘導をはかった。 ・11 月 4 日に記念講演会・シンポジウム「真の国際人とは～グローバル化を支える教養～」を実施し、中国新聞（10/6）全 5 段新聞広告で告知。約 530 名の参加があった。 ・学生募集に関する研修会に 5 回出席。学生募集を取り巻く最新動向についての情報提供、SNS 活用、プレスリリースをテーマにした研修へ参加した。 ・ホームページ、SNS による情報発信を継続して実施。学科が授業風景、海外研修、産学連携、地域連携などの教育活動をコンスタントに配信している。 	<p>率。コンテンツを拡充し、魅力を訴求していくとともに、ユーザビリティの向上をはかり、ユーザーのストレスの少ないサイトを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き効果検証を行い、より効果的な広告配信を目指す。 ・個別記事は時間経過につれ下層に埋もれ目に触れにくくなるため、地域連携等はカテゴリでまとめた集約コンテンツを作成する。 ・学科ニュースのレイアウト、ボリュームに統一感を持たせるためフォーマットを作成し、読み手に伝わりやすい情報発信に努める。
<p>【修学支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育のユニバーサルデザイン化の推進 ・障がいのある学生への合理的配慮の提供 	<ul style="list-style-type: none"> ・合理的配慮の提供として、授業における情報保障を実行する。また、本人の状況や希望に沿って、合理的に支援できるように「所属学科」「障がい学生高等教育支援室」「教務課」「学生課（健康管理センター・カウンセリングルーム含む）が協力体制をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい学生支援室における障がい学生の個別面談を行う(月 1 回以上)。 ・障がい学生支援に関するカンファレンスを月 1 回、障がい学生支援室、学生課、教務課、健康管理センター、カウンセリングルームの合同で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生個別の状況に応じ、月 1～5 回の面談計画をたてて実施（延べ 249 回） ・合同カンファレンスの実施は 4 回 	<p>(課題) 合同カンファレンスが、前期に 2 回、後期に 2 回実施であり、毎月の実施ができなかった。出席者の時間調整が困難であったことと、緊急を要する案件については、縮小した形でカンファレンスを開いたことも原因と考えられる。</p> <p>(対応) 学生への丁寧な対応のために、カンファレンスの持ち方を検討</p>

<p>・課外における学修支援体制の充実</p>	<p>・引き続きアカデミック・サポート・センターにおいて、LAによる個別相談体制、講座等の実施に力を入れる。</p> <p>・GPAによる基準を設定し、学力不振者への補習体制を作る。</p>	<p>・LAによる個別相談、講座等を昨年度と同程度開催する。</p> <p>・ASCの支援体制、把握する課題の学科・部署間との共有のために、学期ごとに課題抽出等を行う場を設ける。結果を学務委員会に報告し、学科等との情報共有を図る。</p> <p>・学修不振者への組織的な補習体制を行う基準を設けるための検討を学務委員会で行う。</p>	<p>・実施している。</p> <p>・2019年7月31日(水)に前期活動報告・反省会、2020年1月24日(金)に後期活動報告・反省会を実施。ASCを利用する学生に学科とASCで共有すべき課題があれば、その都度、情報共有を図っている。</p> <p>・2019年12月24日(火)学務委員会においてGPAを活用して、成績不振・不登校・他に関し、基礎科目について補習体制を作った。</p>	<p>し、短時間での開催や出席者の見直しを図る。</p> <p>(課題) 最小実施人数を下回る講座があった。</p> <p>(対応) 参加人数を増やすための策として、英語力向上については国際英語学科および共通教育部門助教、日本語能力向上については日本文化学科、理数系基礎力向上は管理栄養学科との連携を密にするため新年度開始前に打合せを実施する。そのことにより、学科教員から学生へASC利用促進の流れを作り、どの講座も最低5名以上の参加人数を目指す。</p> <p>(課題) なし(2020年度スタートのため)</p>
<p>【生活支援・国際交流】</p> <p>・ボランティアセンターの機能強化</p>	<p>・地域連携センターとの将来的な統合について検証するために学生課と一体運営をする。そのためにボランティアセンターをランバースホール2階の学生課隣に移設する。移設により同センターの存在と活動について学生の認知度を高め、活動参加へつなぐ環境づくりをする。学生課との一体運営によって、クラブ・サークル活動、学園祭、学生自治会、そしてボランティア活動と学生生活全般のサポートをワンストップで可能にする。</p>	<p>・ボランティアセンターが受け付け学生に紹介する活動への延べ参加者数を今年度比10%増が目標。</p>	<p>・同一フロアでの学生課との完全一体運営により、確実に学生の認知度が高まっているという実感は持っている。活動参加学生数が半年でのべ400名を超えた。</p> <p>(8月末日現在のボランティア登録者数は372名(昨年同期379名、2%減)、センター受付のボランティア活動へののべ参加人数は391名※(前年同期393名)。※当センターが「ボランティア活動」としない「準ボランティア活動」(4月～8月末: イベント数23、学生ののべ参加数237名)を除く。以下、「準ボランティア活動」例。</p> <p>管理栄養学科: 災害に備えた炊き出しボランティア、地元中学校での食に関する指導、高齢者対象の料理教室、学内調理実習室での高齢者対象料理交流。児童教育学科: 小学生の学習支援活動(学内)、子育て広場への参加。</p> <p>生活デザイン学科: 海の環境に関する地域活動への参加。)</p>	<p>(課題) 現在のセンターとしての機能に問題はないが、将来的に「地域連携センター」との一体運営を検討すべきであると考えている。</p> <p>(所感) 学生は、授業の課題やアルバイトに追われ、課外活動に割く時間とエネルギーに余裕がなくなっている。必然的に報酬を伴わない活動にそれらに向けることが困難になっているといえる。反面、授業の一環としての地域社会での活動(後述【社会連携】の項を参照)は増加傾向にある。授業の一環だけに本来の意味でのボランティアとは言えないが、学生にとっては地域社会とのつながり、教室では得られない経験と学び、そして達成感を通じて人間的に成長していることは事実である。純粋に内因的な動機か否かの違いは</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動の奨励・推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・単発型、プロジェクト型あるいは行政組織の委員として活動する学生を顕彰する制度が創設できないか他大学の事例を研究し、実施に向けて制度構築する。(例：活動に応じてポイントを設定し、一定の要件を満たせばポイントを付与し、設けられたグレードに達するとその学生を顕彰する。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が履歴書に書け、かつ、ボランティア活動や社会貢献活動を後押しするような大学としてのオフィシャルな学生表彰制度の創設を準備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・就職活動が空前の売り手市場と化している現在、就職活動に活かすためのボランティア活動の証明書などのニーズは皆無の状況である。表彰制度よりも、大学発信のメディア（Web サイト、キャンパスニュース等）で取り上げる方が、社会的承認を意味する点でも学生への後押しになると思われる。今年度は大学広報誌「キャンパスニュース」や大学の公式 Web サイトで活動ぶりを取り上げることで、社会的承認としての手段とした。 	<p>あるが、外形的な類似性そして活動がもたらす効果において両者に大きな差はない。そこに「地域連携センター」との将来的な一体運営を検討する意味があるといえる。</p> <p>(課題) なし</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流の活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度から協定校として加わった Miriam College(MC)、Assumption College(AC)、仁川大学校からの交換留学生を積極的に受け入れ、キャンパスの多様化をさらに進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学暦の違いで本学への留学が困難な場合は、本学で開催する短期プログラムに参加をしてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仁川大学校から 2 名の留学生を初めて受け入れた。仁川大学校における姉妹校交流プログラムに参加し、担当者同士の信頼関係を築くことができた。仁川大学校への半年ないし 1 年の留学の代替として同校が企画実施する夏季集中プログラムに参加できることになった。 ・MC、AC への学生派遣は実質来年度からの始動の見込み。交換留学生受入れの代替措置としての短期プログラム実施は、学科・センター双方のマンパワー不足のため、BGSU の隔年プログラム「Peace Seminar」への参加を先方へ提案する予定。 	<p>(課題) なし</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ACUCA 加盟大学との協定 	<ul style="list-style-type: none"> ・隔年で開催されるマネジメント会議（今年度はフィリピンでの開催）に課長が参加し、加盟大学関係者と友好関係を築く。Miriam College、Assumption College も訪問し、留学生を送る環境を再度確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・加盟大学との連携を強めるよう活動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マネジメント会議への課長の出席はかなわなかったが、10 月末に AC の学長と学部長が湊学長を表敬訪問し今後の交流について話し合いが持たれた。 	<p>(課題) ACUCA 加盟大学との交換留学プログラムについての学内認知度の低さが課題となっている。</p> <p>(対応) 引き続き情報提供に努める。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・奨学金制度の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・家計急変の状態にある学生へのセーフティネットである大学協会会修学援助制度を的確かつ有効に利用させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生への十分な説明を行い、丁寧な支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も家計急変に見舞われた 2 名が利用し、セーフティネットとしての機能を果たすことができた。次年度から開始される文部科学省の 	<p>(課題) なし</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・学生の心身の健康を維持するための相談・支援機能の充実 ・各種ハラスメントへの相談・解決機能の強化 ・クラブ・サークル活動の活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人体制で勤務する健康管理センター保健師のサポートを継続させる。また長年学生の心のケアをしていただいたベテランカウンセラーに代わる人材を採用する。 ・相談窓口の多くを占める学生課に、気軽に相談できることを示す掲示等を行い、学生への周知を図る。 ・競技で成果を出しているクラブ（例：弓道部、エスキーテニス部）を本学 Web、広報紙等の広報媒体で積極的に取り上げ、紹介・顕彰することで学生の課外活動参加へのモチベーションを上げる。また可能な限り練習環境の整備を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度初めの繁忙期と保健師の休日要員をこれまで通り若手カウンセラーを起用し、これまで通り支えていく。また若手のカウンセラーに週 1 回学生対応をしていただく。 ・学生が相談しやすい環境づくりに努める。 ・比較的大きな大会での好成績は Web の新着情報で適宜紹介する。また、新入部員を「キャンパスニュース」で紹介する（後期）。 	<p>「修学支援新制度」によって経済的困難にある学生への救済措置がより充実することが期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例年以上に心身に問題を抱える新入生が多い年度であったが、繁忙期の保健師サポートにより、業務的な過度の負荷を軽減でき、教職員の心のケアへの対応へも時間を割くことができています。 ・後期のオリエンテーションでカウンセラー自らが 1 年生対象に講話をし、学内における心の相談窓口の紹介ができた。 ・中国地区大会で着実に成果を挙げているエスキーテニス部の賞状のコピーは学生課ロビーに掲示しアピールしている。「キャンパスニュース夏号」で、エスキーテニス部、ダンス部、吹奏学部を取り上げて活動を紹介した。新入部員が増え活動が活発になっている弓道部について、庶務課と連携して環境整備に取り組んだ。 	<p>(課題) 充実したサポート体制のもと、学生へのケアが可能になってきているが、精神的に深刻な問題を抱える学生が一定数存在しており、対応の限界を痛感させられる。</p> <p>(対応) 現状の対応は最低でも維持する。</p> <p>(課題) なし</p> <p>(課題) クラブ・サークル活動がやや低調と感じる。</p> <p>(対応) 健闘している学生をできるだけ大学媒体で紹介し、クローズアップすることで他の学生の愛校心を向上させるように努める。</p>
<p>【キャリア支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ライフキャリア構築をめざすキャリア教育の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ライフキャリア科目「キャリアプランニング」「女性とライフキャリア」の運営に協力することで、本学のライフキャリア教育の構築に寄与できるようにする。 ・専門科目の授業とライフキャリアの関係（社会とのつながり）を、学生が自ら見出せるよう企業と学科との連携を通じて支援していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度より開講される「女性とライフキャリア」について、共通教育部門と協議しながら連携のあり方を検討する。 ・企業との連携を強めて、授業を通してライフキャリア構築のための支援ができるようにする。 ・昨年度から始めた企業見学会（2018 年度は 3 社実施）をさらに拡大し、学科と連携しながら充実させていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共通教育部門と協議した結果、キャリアセンターとの連携は当面のところ必要ないことを確認した。 ・企業と学科との連携の強化に努めている。管理栄養学科では、今年度から「1 年生のためのキャリア支援」の一環として職場見学を計画しており、食品メーカー 2 社、化粧品メーカー 1 社、ドラッグストア 2 社と連携して 2 月上旬に見学会を実施し、キャリアセンター職員と学科教員が引率した。 <p>また、生活デザイン・建築学科では、企業 5 社を招いて、建築士課程の 1～3 年生を対象とした企業研究会を 12 月 4 日に実施した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・就職活動の早期化が顕著になってきているので、低学年から就職に対する意識づくりやライフキャリア構築の基礎づくりを進めていくことが重要となる。そこで、企業との連携を一層強化し、多様なプログラムを開発することが必要となる。

<p>・学生の個性に応じた進路・就職支援</p>	<p>・就職ガイダンス・セミナーのプログラムを学科の特性、学生の就活状況を考慮して見直す。</p> <p>・学生との面談をさらに充実させる。</p> <p>・進路決定率の向上をめざす。</p> <p>・2020年度に「大学等におけるインターンシップの届出制度」へ申請できるよう準備をすすめる。</p>	<p>・各学科の就職活動実態に合うように、また各学生の活動状況をふまえて柔軟に対応できるように就職ガイダンスやセミナーのプログラムを工夫する。例えば、幼稚園・保育園等をめざす学生が多い幼心については、4年生の後半に集中する就職活動に合わせて、プログラムを3年生の後半からスタートさせるよう特別に編成することなどを行う。</p> <p>・上記の新しいプログラムに合わせた適切な面談時期を検討するとともに、「進路登録票①、②」の面談が連動しやすいように変更し、効率のよい面談が実施できるようにすることで、2018年度より面接回数を増やす。 今年度の「履歴書」面談については、「エントリーシート」の書き方」セミナーを通じて添削面談への参加を促すことで、より充実した履歴書作成ができるよう支援する。</p> <p>・全学の実就職率 92%をめざす。また、就職の有無に関わらず、すべての学生が卒業後の進路を決定して卒業できるよう支援する（進路決定率 100%）。</p> <p>・申請に必要な要素のうち、①インターンシップの事前事後における適切な学生指導（特に、実習期間中のモニタリングを学科教員と共同で行う必要がある）、②教育的効果を測定する仕組みの 2 点について本年度中に整備・実施する。</p>	<p>・左記の方針に従って、就職ガイダンス・セミナーのプログラムを改善し、実施しているところである。改善の効果については、出席状況や就職実績を確認しながら検討していくことにしている。</p> <p>・今年度の面談状況は次のとおりである。 「進路登録票①」の提出率は、国際 96.1%、生活 97.9%、栄養 100%、幼心 54.8%となっている。幼心は新型コロナウイルス感染拡大予防のため、面談なしの提出となった学生が多い。他の学科については提出にあたって少なくとも 1 回は面談を実施しているため、順調に進んだといえる。「進路登録票②」の面談は後期から実施しており、提出率は、国際 84.3%、生活 93.6%、栄養 100%、幼心 16.4%となっている。なお、幼心の提出率が低いのは、就活時期に合わせて年度後半から面談を開始したためである。 「履歴書」面談は、ベネッセによる「エントリーシート」の書き方」セミナーを 11 月から実施し、これに連動させて進めた。</p> <p>・実就職率（カッコ内は、就職率）は、国際 89.8%（96.7%）、生活 84.3%（93.5%）、栄養 97.4%（98.7%）、幼心 98.7%（100%）であり、全体では 93.1%（97.6%）となり今年度の目標は達成した。学科により上下があるが、大学全体では昨年度比+0.2%となった。 卒業後の進路を把握することができなかったのは 1 名のみであり、ほぼすべての卒業生について卒業時の進路の動向を把握することができた。</p> <p>・今年度のインターンシップ先は 21 社であったが、そのうち 7 社（プリンスホテル、野村證券、ディスコ、アンフィニ、呉信用金庫、三島食品、福屋）において実習期間中のモニタリングを実施した。 教育的効果を測定する仕組みとしては、「就職</p>	<p>・改善の効果をガイダンス・セミナーの出席状況や就職実績をふまえて検討する必要がある。幼心については、幼稚園・保育園等の専門職以外（特に、一般企業への就職）を目指す学生への対応を考慮する必要がある。</p> <p>・一般企業の就活が早まっていることから、特に幼心の一般就職希望者への対応が必要となるので、一般就職希望者を対象とした「進路登録票①」の面談を他学科と同時期に開始する必要がある（本年度後半から希望者への面談を進めている）。</p> <p>・2 月から問題となり始めた新型コロナウイルスの影響で企業の Web 面談・面接が増加していることに鑑み、また外出自粛中の学生へ継続した支援を行うために、4 月より学生との Web 面談を実施している。次年度についても引き続き対応が求められる。</p> <p>・今年度は就職率と実就職率の乖離が大きくなる傾向がみられたので、早期から進路に対する意識づくりを進めていくことが必要となる。</p> <p>・インターンシップ先でのモニタリングをさらに充実させる必要があるため、学科と連携しながら体制の整備を急ぐことが課題となる。</p>
--------------------------	--	--	--	--

<ul style="list-style-type: none"> キャリアカウンセリングの充実 	<ul style="list-style-type: none"> 各学科と連携した取り組み（キャリアプランニングを含む）をさらに充実させる。 卒業生を対象とした面談（カウンセリング）、就職先での人事担当者との面談、就職先への調査等を通じて、卒業生の就業状況を把握する。 卒業生を対象とした調査等を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年に引き続き栄養、幼心と連携して実習の事前・事後にキャリアコンサルタントによるカウンセリング（事前準備と振り返り）を実施する。 全教員による企業訪問での人事担当者との面談において卒業生の動向把握を徹底させる。 卒業生へのメール配信による就業状況調査を実施する。 	<p>レディネス・チェック」を事前事後に実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 栄養では臨地隣地実習の前後に3回のカウンセリングを4グループに分けて実施、幼心では2年生の幼稚園実習の前後に3回のカウンセリングを実施した。 幼心については、実習の訪問指導の際に教員が訪問園への就職者リストを持参し、就業状況の確認を行った。他の学科については、これまで通り2月実施の企業訪問において就業状況の確認を行った。 今年度は一部の卒業生を対象としてアンケートを実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 栄養、幼心以外の学科におけるキャリアカウンセリングの活用について検討する。 今年度から企業の人事担当者を対象とした「社会人基礎力に関するアンケート」を実施している。本学の業界セミナー等に参加された企業に依頼し21件の回答を得ているが、今後はさらに回答件数を増やすとともに、分析結果をキャリア支援に活用していく必要がある。 次年度は卒業生全員に回答を求められるようにする。
<p>【教育研究環境（施設設備）】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ソフィア1号館給食管理実習室改修工事 ソフィア1号館エレベータ改修工事 	<ul style="list-style-type: none"> 厚生労働省指摘に対応すべく給食管理実習室の改修を行う。 老朽化したエレベータを改修することにより学生の安全確保を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 構造壁改修に伴う強度については、設計業者に問い合わせ中。また、改修業者については、設計・施工業者を決定後、春休み期間中に工事が完了した。 エレベータ改修については、次年度以降改修。 	<ul style="list-style-type: none"> 3社より見積もり提示後、改修業者決定し工事は春休み期間中に着工、3月末工事が完了した。 建物の老朽化、また学生の安全の確保のため計画的に整備を行う必要あり。
<p>【教育研究環境（図書館）】</p> <p>教育環境の整備（図書館）</p> <ul style="list-style-type: none"> 図書館見学ツアー及び図書館ガイダンスの充実 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生対象の前期必須科目「初年次セミナー」では、授業を1コマ分用いて、図書館職員が「図書館見学ツアー」と「図書館ガイダンス」を実施しており、学生の理解度を高めるために実体験時間を増やす。 ガイダンス定員を約40名に設定し、少人数制で実施することにより、学生の理解度を高める。 欠席者へのフォローを強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「図書館ガイダンス」の説明時間を短縮し、「パスワード設定」や「実際にOPACを利用して、書架に本を探しに行く」時間を増加することにより、受講者が自分の探したい資料を100%的確に探し出せることを目標とする。 4月24日（水）、5月8日（水）、5月15日（水）、5月22日（水）、5月29日（水）、6月5日（水）の「初年次セミナー」終了後に教員から欠席状況を確認し、図書館職員がガイダンスを個別に実 	<ul style="list-style-type: none"> 予定通り「初年次セミナー」における8回の「図書館ガイダンス」を実施した。ガイダンスでは実際にOPACで本を検索し、書架に本を探しに行き、見つけた本をカウンターで借りる作業を行い、受講者は100%的確に本を探し出すことができるようになった。また50名以上のクラスはガイダンスの理解度を高めるために2グループに分けて実施した。 授業終了後に教員から17名の欠席者の連絡があった。17名のうち6名は再履修者で、2018年度に既にガイダンスを受講しているため、個別ガイダンスは不要であった。他の欠席者のうち7名の学生が後日個別ガイダンスを受講済で 	<ul style="list-style-type: none"> 初年次セミナーの授業での図書館見学ツアーと図書館ガイダンスの100%実施を達成することはできなかったが、2019年度の1年生の在籍者数335名の内、4名のみ未受講者という結果については、ほとんどの受講者に対して図書館ガイダンスを実施することができたと考える。連絡をしても返答のない学生に関しては、図書館が学生の学びにとって重要な役割を果たすことへの動機付けをしていくことが課題となる。そのため、2年次のオリエンテーション時

<ul style="list-style-type: none"> ・課題図書の実施について ・Hiroshima Active Library 協働事業の充実 ・図書館利用者用パソコンの新規入替に伴う学修環境の整備及びラーニング・アドバイザーの個別学修支援の強化 	<ul style="list-style-type: none"> ・2018年度の図書委員会で審議した結果、各学科の有志教員により、既存の図書館資料を利用又は新規購入して、学生に授業の課題を提出させることが決定した。課題図書として利用する資料については冊子体資料、電子資料どちらも可とする。 ・広島県内の公共図書館と大学図書館が同一テーマの事業（主に展示）を同時期に協働して実施している。図書館職員が教員と連携し、授業の中で、展示に使用するポップ等を学生に作成させる。 ・2018年度3月に学生貸出用ノートパソコン20台を新規入替する予定である。2019年度はインターネットコーナー・情報検索コーナー・プレゼンテーションルームのパソコンを新規入替することにより、学生のより良い学修環境を整備し、ラーニング・アドバイザーの個別学修支援についての掲示板を図書館入口に設置し、日程や活動について学生に周知させる。 	<p>施し、ガイダンス受講者100%を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度より課題図書の実施をすることにより、人文学部145、人間生活学部450、共通教育部門79、合計674の入館者数・貸出冊数の増加を目標とする。 ・Hiroshima Active Library 協働事業の2019年度のテーマは「広島」であるが、司書課程の教員と連携して、授業の中でテーマに関する書籍の選書方法について学修し、展示に使用するポップ等を学生に作成させることにより、テーマに関する内容や書籍等の関心を深める。 ・学修環境を整備し、「ラーニング・アドバイザー」による個別学修支援を強化することにより、入館者数、前年度比、3%アップ（約2,000人）を目標とする。 	<p>ある。残り4名の学生については担当教員から数回連絡してもらったが、返答がないため未受講である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期は国際英語学科の河内教授、児童教育学科の神野教授、共通教育部門の近藤特任准教授、後期は日本文化学科の佐藤教授、児童教育学科の森保准教授、管理栄養学科の土谷准教授、生活デザイン学科の小林教授・福田准教授が課題図書を実施し、電子書籍も1タイトル購入した。この事業の参加申請をしていない教員も課題図書の実施をしており、貸出冊数については、11,537冊（昨年度：10,717冊）で、前年度に比べて820冊増となった。課題図書の制度の効果があったといえる。また入館者数については、59,816名（昨年度：55,479名）で、前年度に比べて4,337名増となった。 ・今年度のHiroshima Active Library 協働事業の展示期間は12月1日から12月7日で、本学図書館での展示期間は12月2日から12月20日とした。2019年度の共通テーマは「広島」で、本学のテーマは「広島と平和」とし、9月後半から11月にかけて、「学習指導と学校図書館」の授業の中で選書を行い、選書リスト作成、POP作成を行った。また展示に関しては①原爆によって破壊された広島（過去）②破壊された町・広島の復興（過去から現在）③現在の平和への取り組み・継承活動（現在・未来）の3部構成で行った。 ・1階のユースフルコモンズ以外の図書館利用者用パソコンをWindows 10に新規入替した。またラーニング・アドバイザーの個別学修支援についての掲示板を図書館入口に設置し、入館ゲート周辺にもラーニング・アドバイザーの日程等の情報を掲示している。入館者数については課題図書の欄に既に明記している。 	<p>に個別ガイダンスを受けるようチューターに依頼する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度は課題図書の予算を60万円計上していたが、実際は6,415円の電子書籍を購入したのみであった。ほとんどの教員が図書館既存の資料を利用して課題図書を実施した。2019年度は課題図書事業に申請した教員のみがこの予算を使用することができたが、2020年度は期の途中でも予算が余っていれば、全教員がこの予算から課題図書を購入できるように変更し、より多くの教員に課題図書の実施について呼びかけていく予定である。 ・この協働事業は今年度で終了となる。 ・入館者数増加の要因は「ラーニング・アドバイザー」の個別学修指導の強化による増加より、教員の課題図書の実施による増加の方が大きいと考える。従って2020年度は更にラーニング・アドバイザーについて学生に周知徹底することが課題である。
<p>【教育研究環境（研究環境・研究倫理）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得の奨励・支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・科研費説明会を実質的なものとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・科研費応募件数 15件、新規採択件数 	<ul style="list-style-type: none"> ・科研費応募件数 14件、新規採択 1件。過去 	<ul style="list-style-type: none"> ・科研費の応募は微増傾向にある。但

<p>科研費説明会（9月）と、申請者への個別対応、産学連携のための「シーズ集」の作成・改定、科研費「研究活動スタート支援」の奨励</p> <p>・研究倫理遵守の徹底 公的研究費の不正使用、研究における不正行為についての説明会の開催と、新任教員への「グリーンブック」の受講</p>	<p>に、個別的な対応を行う。個別対応は今も行っているが、予約制として、時間を確保し、文学館1階、旧総合研究所にて行う。2016年後期から開始された、新制度による本学特別研究助成を、科研費採択への支援に特化した助成とする。2017年発刊した産学連携のための「シーズ集」（第三）を作成する。4月赴任の教員に、科研費「研究活動スタート支援」を紹介する。</p> <p>・4月の教授会、公的研究費の説明会（6月）、科研費応募要領の説明会（9月）において、公的研究費の不正使用、研究における不正行為について、説明する。「グリーンブック」については、現在職教員は全員修了したので、4月赴任の教員に受講を促す。</p>	<p>5件</p> <p>・科研費「研究活動スタート支援」採択件数 1件</p> <p>・産学連携に関する会議等に1度は出席する。</p> <p>・公的研究費使用の説明会への出席率 受給者の100%出席</p> <p>・科研費応募の説明会への出席者数 20人</p> <p>・新任教員全員の「グリーンブック」修了</p>	<p>に前例がない。この11月の申請に際しては、十分な書類の推敲を各教員に依頼する。</p> <p>・科研費「研究活動スタート支援」応募2件、採択0件であった。 科研費受給は、継続を含めて12件であった（内1件は研究期間延長）。科研費研究分担は継続5件（内1件は研究期間延長）であった。また、外部資金受給は新規2件、継続1件であった。外部資金研究の分担として新規1件であった。</p> <p>・産学連携に関する会議等に、適当なものがなく出席してはいない。</p> <p>・公的研究費使用の説明会は、6月7日（金）に行い、23名（教員20名、職員3名）の出席があった。受給者は30名（職員1名含む）であり、出席率は70%であった。欠席者には、資料を配付した。</p> <p>・科研費応募の説明会は、9月20日（金）に行い、23名（教員20名、職員3名）の出席者であった。</p> <p>・グリーンブックについては、今年度から2度目の受講となり、67名（67名中）が修了した。</p>	<p>し、2019年度の採択件数は1件と、過去に例を見ない。そのため、2020年度の申請（11月）に当って、課員・所長が申請書を読み、変換ミス等のコメントを付し、申請者に返却した。この効果は、2020年4月に判明するが、効果は見られなかったとしても、今年度も継続して行なう。また、科研費申請についての書籍も多く出版されているので、それらを有効に活用し、申請書作成時に活かす。加えて、その知識・情報を、「科研費説明会」において説明する。申請書作成には限られた時間の中で行なわれるので、実現は不可能かもしれないが、また、申請者の承諾が必要であるが、申請書を申請者相互が見ることが出来るようにする。そのことによって得られる示唆もあると思う。</p> <p>・公的研究費使用説明会、科研費応募の説明会、ともに限られた時間の中での説明である。簡にして要を得た説明を心掛ける。</p> <p>・研究倫理遵守のため、日本学術振興会による研究倫理eラーニングコースの受講が、2回目も可能であることが分かり、実施し、修了率は100%であった。</p>
<p>【教育研究環境（情報環境）】</p> <p>・Wi-Fi環境の充実</p> <p>・情報機器の整備</p>	<p>・Wi-Fiスポットの増設</p> <p>・回線の強化</p> <p>・サーバ機器の強化</p> <p>・DNSサーバのクラウド化</p> <p>・学内パソコン環境のwindows10への変更</p>	<p>・学生の要望の多い施設のWi-Fi機器増設と利用増加に比例した回線速度改善</p> <p>・DNSサーバのクラウド化により停電時等に左右されない環境の構築と増大するネットワーク環境の帯域確保およびクラ</p>	<p>・Wi-Fi機器については、ソフィア3階の増設ならびに図書館Wi-Fi機器の更新をおこなった。また、会議室においてもWi-Fi機器の利用を促進すべく機器を設置した。また、学内パソコン特に教職員用パソコンのwindows10化に向</p>	<p>・今後Wi-Fi機器を利用可能な教室等を予算化して、増設をしていく予定。それに伴い、増大するトラフィックに対応する帯域確保のため通信レボ</p>

		イアント環境の整備	け、機器の配布が完了した。	ートを参考に、今後確保する予定。 教職員用パソコンの Windows10 化は 今年度中に全教職員に配布完了。
<p>【社会連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域連携センターの位置づけを明確にし、組織体制を整備 地域連携の強化 	<ul style="list-style-type: none"> 地域連携センターの組織を整備し、各連携事業活動のバックアップができる体制作りをする。 各学科等の 2018 年度の地域連携活動の実績から、地域連携ができる専門的能力を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 組織作りのための検討会議を開催する。 各学科へ地域と連携できる専門的能力の整理を要請する。 	<ul style="list-style-type: none"> 組織の位置付けについて議論が進むよう要請する。 学科等への専門的能力の整理養成はできていない。 2019 年度の地域連携活動 <ul style="list-style-type: none"> *雲月山の山焼きボランティア（伊藤） *マイクロプラスチックの脅威から子どもたちを守る 漂流ゴミ回収活動（田頭） *昆虫を守るための田んぼづくり～田植え～廿日市市栗栖（市川） *音戸町「未来につなぐ『豊かな海づくり』」への参加（田頭） *ひろしま地域食材 PR 促進事業（下岡） *早稲田公民館「家で楽しむ美味しい一杯の珈琲と具だくさんトースト」（渡部） *東区連携事業：20 歳代女性対象の料理教室（市川） *東区連携事業：夏の夜、祈りと平和の夕べ（永野） *大学独自事業：食物アレルギーっ子のデイキャンプ（妻木） *早稲田公民館：親子肉ランチ料理教室（渡部） *東区連携事業：おひるねアート&手形アート講座（児童） *中央公民館：広島市短詩型文芸大会講演会講師（柚木） *昆虫を守るための田んぼづくり～稲刈り～廿日市市栗栖（市川） *広島湾さとうみフェスタ 2019 イベント司会：学生 2 名 	<p>（課題）より良い活動を支援するためのセンターとしての組織づくりが進んでいない</p> <p>（対応）組織づくりが進むよう大学執行部へ引き続き上申する。</p> <p>（課題）学科の専門的能力の整理ができておらず、地域からの連携要請に迅速に対応できない体制である。</p> <p>（対応）センターの組織整備を行い、学科の情報を整理するための人手確保をする。</p>

			<ul style="list-style-type: none"> *西条鶴：「新酒干支ラベル」デザイン（檜崎） *昆虫を守るための田んぼづくり～餅つき～廿日市市栗栖（市川） *JA 広島市温品支店連携：東区農業祭（市川） *JA 広島市牛田支店・東区役所連携：あやめ祭「食育&健康増進コーナー」（市川） *東区・エキキタ連携事業：まち恋スイーツプロジェクト（国際・生活・栄養） 	
<p>【社会貢献】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会のニーズにあった公開講座・セミナー等の開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・公開セミナーは、国際英語学科を担当とし、年4回開催する。 ・シティカレッジ（広島市と教育ネットワーク中国の共催）に、児童教育学科担当で4回分の講座を提供する。 ・早稲田アカデミー（早稲田女性会、早稲田公民館の共催）に、専門分野に関する講演を6回分提供する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・150名以上の申し込み者数をめざす。 ・85%以上の満足度をめざす。 ・参加者数増につながるような講座を提供する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公開セミナー 10/5,12,19,26(土)に国際英語学科の教員4名（波多野、Herbert、磯部、関谷）が担当し、実施した。 申込者：201名 受講者数：①111名②82名③65名④91名 講演内容の満足度：75.4～87.8% 85%以上は1回 ・シティカレッジ 5/13,27,6/3,10(月)に児童教育学科教員4名（大橋、村上智、森保、加藤）で実施した。 申込者：23名 出席率：58.3～78.2% 満足度：75%（回答12名） ・早稲田アカデミー 早稲田公民館からの依頼により、今年度も6名の教員が担当した。 5/30(木)戸田慧「文学から見るアメリカの食卓」 参加人数：25名 満足度：92% 6/21(金)福田道宏「日本画の楽しみ方」 参加人数：18名 満足度：100% 7/25(木)関谷弘毅「海外の生活を知る」 参加人数：18名 満足度：94.4% 9/25(水)Daniel Hougham「カガの文化と生活」 参加人数：14名 満足度 93.3% 	<p>（課題）なし。来年度も同様に開催する。管理栄養学科担当。</p> <p>（課題）参加者の満足度は高かったが、講座の内容を紹介する文章が、一見、保育や教育など特定の職種以外の50～70代の一般市民の興味につながるテーマや内容に見えず申し込みが伸びなかった。 （対応）50～70代の市民が興味を持つテーマ設定やタイトルの付け方に注意する。来年度は共通教育部門担当。</p> <p>（課題）なし。2020年度は、植西教授、田頭教授、福田教授、妻木准教授、中村教授、西口教授に依頼済み。</p>

			<p>10/24(木)市川知美「防災食」 参加人数：32名 満足度：100%</p> <p>11/22(金)石村和敬「健康・食事・病気」 参加人数：17名 満足度：94.1%</p>	
<p>【FD活動】 ○教育の資質向上に向けての計画の策定と実施 教育の質的向上を図るために、FD研修会を実施し、教員の教育力の向上を図るとともに、研修会への積極的な参加を推し進める。また、主体的な学びを導く手法の導入に向けて教員間の情報共有を行う機会を創出する。</p>	<p>・これまで、行われているFD研修会及びFD・SD研修会を2019年度も継続して行う。</p>	<p>・年に5～6回のFD研修会を実施する。</p>	<p>・FD研修会を大学院FD研修会も含め10回実施した。</p> <p>4/2 大学新任教員・職員オリエンテーション</p> <p>6/5 第1回FD・SD研修会 「ファシリテーション力を高めるために」 講師：志賀誠治氏（人間科学研究所所長）</p> <p>6/26 第1回FD研修会 「広島女学院大学における学生の主体的な学びについての取り組み」 進行：田頭紀和</p> <p>8/7 第2回FD研修会 「成績評価とルーブリックの連動～カリキュラムマネジメントの確立に向けて～」 講師：桑木康宏氏（学びと成長デザイン研究所）</p> <p>9/17 第3回FD研修会 「ディプロマポリシー達成に向けてカリキュラムを機能させるためのアセスメント～カリキュラムマネジメントの確立に向けて～」 講師：桑木康宏氏（学びと成長デザイン研究所）</p> <p>9/25 第1回大学院FD研修会 「＜女性研究者育成＞へ向けて 一魅力ある大学院教育一」 講師：灰谷謙二氏（尾道市立大学大学院） 重野裕美氏（広島経済大学）</p> <p>10/30 第2回FD・SD研修会 「大学生基礎力レポートから見られる貴学の特徴と今後の指導について」 講師：安藤虎太郎氏（ベネッセiキャリア）</p> <p>11/20 第3回FD・SD研修会 「高校の変化と新入試時代の学生募集」 講師：青木伽尚子氏（(株)進研アド）</p>	<p>・2019年度はディプロマポリシー（DP）と結びつけた教学システムづくりに重点を置いたため、例年に比べ多い開催数となった。</p>

<p>○教育研究の質向上に絶えず努め、顕著な学習経過を達成する。 既存の授業評価アンケートの問題点を明らかにし、より教育効果を高める手法に変更するとともに、カリキュラムポリシー (CP) やカリキュラムマップ (CM) の浸透状況を把握できるよう検討を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> FD 研修会への参加率を増加させるために、メールや教授会での連絡、学科会等での周知を行うとともに、各研修会での学科ごとの参加状況の公表を行い、参加率の増加を促す。 学外で行われる FD に関する研修会に積極的に参加し、得られた情報を共有する場を設ける。特に FD 委員に対して積極的な参加を促す。 主体的な学びを導く手法についての情報共有を行うために、研修会を実施するとともに、授業参観による積極的な情報の獲得を進める枠組みを作る。 学生参画型の授業運営について、スケジュールアシスタントや学生ファシリテーターの授業への参加について情報を集めるとともに、 	<ul style="list-style-type: none"> 全ての研修会を通した参加率 100%、各研修会への参加率 80%を目標とする。 各学科で必ず 1 名、学外の FD 活動に参加するように各学科に促す。 アクティブラーニングに関する研修会を実施する。 効果的な授業参観の実施に向けた授業情報のリストを作成し、教員間で情報の共有ができる体制を作る。 学生参画型の授業運営に関する研修会を実施する。 	<p>新井千晶氏 ((株) 進研アド) 延原範昭氏 ((株) 進研アド)</p> <p>12/26 第 4 回 FD 研修会 「シラバス充実に向けた科目間連携&授業の工夫共有ワークショップ 講師：桑木康宏氏 (学びと成長デザイン研究所)</p> <p>1/7 第 5 回 FD 研修会 「2020 年度教務関係重要事項説明会」 進行：教務課員</p> <ul style="list-style-type: none"> 全ての研修会を通した参加率は 100%であり、目標を達成できている。各研修会の平均参加率は 79.8%であり、現状では目標を若干下回った。夏期休暇と冬期休暇期間中に実施した研修会の出席率が 60%代の参加率であったが、それ以外は 75%以上の高い参加率であった。 全ての学科で 1 名以上の教員が学外の FD 活動に参加できた。 6/26 第 1 回 FD 研修会において、本学のアクティブラーニングの導入状況を知らせるとともに授業改善に向けた意見交換を行うことができた。また、第 3、4、5 回 FD 研修会においても授業に関する取り組みの意見交換を行うことができた。 昨年度末に行ったアクティブラーニングの導入状況調査の結果を全専任教員に配布し、第 1 回 FD 研修会において、授業方法の共有および連携を促した。また、カリキュラムデザインに向けた研修会において、DP 達成に向けた授業改善の一環として、教員ごとの取り組みを意見交換した。 第 2 回 FD 研修会にてファシリテーションの必要性について学ぶ場を作った。また、「女性とライフキャリア」で導入された学生ファシリテーター 	<ul style="list-style-type: none"> 2019 年度は例年に比べ研修会の実施回数が多かったため、夏季、冬季休暇期間中実施にしたことが、参加率の低下を招いたと考えられる。休暇期間中に実施する場合、より早い告知をすることで改善できるものと考ええる。 2019 年度はエリザベト音楽大学で大学教育学会の課題研究会が実施され、この研修会への参加者が多かった。それ以外への参加は 3 名のみであった。引き続き、学外での FD 活動への参加を促す必要がある。 引き続き、DP 達成に向けた授業改善の取り組みと結びつけ、教員の実践する事例をもとにした意見交換の場を継続させる必要がある。 研修会を通して教員間の授業の情報交換・連動を進めることで、自発的に授業参観が進むように、継続的な研修会の実施が必要である。 アクティブラーニングをより効果的に実践できるように、総合学生支援センターと連携して効果的に SA を配
---	--	---	--	---

	<p>導入に向けた研修等を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2018年度後期から実施している中間アンケートについて、中間アンケートと学期期末アンケートの回答の変動状況を比較分析し、授業評価アンケートの問題点や改善点を明らかにする。 DPやCPに対するアセスメントに対応した授業評価アンケートを実施できるよう、他のアセスメント調査項目との比較・検討を行うとともに、カリキュラムデザインについて共通理解を行うための研修を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在のアンケートにおける問題点と改善点に基づいた変更プランを作成する。 カリキュラムデザインに関する研修会を実施するとともに、関係各部署との意見交換を行いながら、授業評価アンケートに変更を加える項目を選定する。 	<p>ター（スチューデント・アシスタント：SA）からファシリテーションの業務についての情報を集めた。2020年度に向けてSAの研修会を2/20、3/12に行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回FD研修会において、昨年度後期の中間アンケートと期末アンケートの結果の比較結果を教員に伝えた。中間アンケートの実施から、授業評価アンケートの回収率の低下が顕著に現れてきたこと、また、中間アンケートと期末アンケートの結果の間に大きな差や効果が見られないことから、中間アンケートの内容を見直し、実施することとなった。 カリキュラムデザインに向けて、第2、3、4回FD研修会で、思考方法と作業手順とともに、DP達成に向けた授業の連動について作業を行うことができた。この作業を通じて、教務課、キャリア支援課と連携し、すでに導入しているシステムを連動させ、DP達成についてアセスメントを行えるよう、方針の共有をすることができた。授業評価アンケートについては、2020年度中に学科DPの細目や科目の位置付けが検討させることから、これらの検討結果を受けて変更を考えることとした。 	<p>置するとともに、SAの養成を進める必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 中間と期末のアンケートが同じ設問であることから、学生にアンケート疲れが現れていると予想される。中間アンケートを実施する場合には、より簡易なアンケート等に変更する必要がある。 引き続きカリキュラムデザインについての教員への研修を進めることで、DP達成に向けたカリキュラムの構築を進める。授業評価アンケートについては、カリキュラムデザインの完成のち（2021年度以降）に、変更を加える。
<p>【SD活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新入教職員に対して早い時期に本学の「建学の精神」、「教育理念」を理解させる。 年度当初にSD年次計画表を作成し計画的に実行する。 教育ネットワーク中国の研修への参加を増やす。 他大学のSD活動の情報を得て参考にする。 	<ul style="list-style-type: none"> FD担当者と打合せて実現させる 例年実施している継続すべき内容、新しく取り入れるべき内容の意見をきき、可能な限り意見を吸い上げる。 窓口担当者からの情報を、内容を考慮し総務課と連携し派遣する職員を選定する。 外部研修等で他大学の職員とつながりを作りSDの状況を聞き取り調査する。 	<ul style="list-style-type: none"> 4月の新入教職員オリエンテーションに、学長による「建学の精神」、「教育理念」を説明するプログラムを設ける。 FD・SD研修会、及びSD研修として5回開催する。 新入職員向け研修は必須として参加を課し、その他、一般職員にも、内容を考慮し研修への参加を促す。 2020年度のSD活動に反映させるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 4月2日：新任教職員オリエンテーションを開催し、学長から直接「建学の精神」について説明を受ける機会を設けた。さらに各部署の責任者がガイダンスを行うことで、新任教職員への本学への理解を深めることができた。 6月5日：全教職員を対象にFD・SD研修会として外部から講師を招き、「ファシリテーション力を高めるために」という講演会を開催し、参加型授業を実施するために、teacherとfacilitatorをバランス良く使い分ける事の大切さを学んだ。 8月26日：SD研修会として外部から講師を招き、「身近な働き方改革」と題しての研修を開催し、ファイリングを徹底し、整理整頓を行うこ 	<ul style="list-style-type: none"> 課題として、教職員からの意見を吸いあげているか疑問がある。来年度に向けどのようなSD活動を希望するか、アンケートの実施等を考えている。 参加率を上げるために、全教職員が参加しやすい開催時間を考えることも必要だが、教職員の参加意欲を上げるための策を考えて行く必要がある。

			<p>とによって、超過勤務の軽減に繋がったこと、社員のボトムアップによる事務所作りの成功例を直接聴き、風通しの良い職場作りが「働く意欲」を高めることを学んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月1日：創立記念日に、全学院研修として、全校部の教職員が集合し学院全体の問題点などを共有した。 ・10月30日：全教職員を対象にFD・SD研修会として、外部から講師を招き「大学基礎力レポートに見る本学の特徴と今後の教育について」という講演を行い。学科別学年別の基礎力を学んだ。 ・11月20日：外部から講師を招き「模試から見える志望状況とこれからの大学入試改革について」という実際の模擬試験における志望校記入から見える、本学の立ち位置を学科別にすることができた。 ・12月4日（水）：人権週間に広島法務局から講師を招き、「教育現場におけるハラスメントについて」学んだ。質疑応答では多くの質問が出、教職員が身近に感じていることを、学ぶことができた。 ・新入職員に対し、教育ネットワーク中国の新人研修への参加を課し、他大学の職員との交わりを持つ事ができた。 ・階層別研修にも各職員に希望を取り、前期、後期各1回の希望にあったテーマの研修に派遣した。 	
<p>【IR】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育理念実現に向けての学習成果の可視化と検証 ・ライフキャリア教育構築に向けての学習成果の可視化と検証 ・学習成果を可視化するための指標（KPI等）を設けて教育の達成度を常時モニターする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメント・ポリシーにもとづいて具体的な学習成果の評価指標を策定し、分析を実施する。 ・ディプロマ・ポリシー（ぶれない個、多様性、寛容と協働、ライフキャリア基礎力）に関する学習成果を測定する方法について検討する。 ・学習成果の評価結果を可視化し、達成度の推移を明示する方法について検討し、実施する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・IR委員会において継続して検討中であり、FD委員会、教務課と協議している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・FD委員会、教務課が検討しているカリキュラムマネジメントの方針と連携しながら、分析の方向性を検討する。 ・卒業生アンケートに加えて、新入生アンケートをIR委員会が担当し、両者の関連性について分析する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ディプロマ・サプリメント（学修履歴証明書等）の活用について検討する。 ・IR機能を強化するための体制を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・IR委員会は現在3名の教員と2名の職員（庶務課施設・情報担当、教務課長）で構成されているが、データ分析を担当できる人員が不在であるため、機動的にIRを実施できる体制になっていない。今後、IRの需要が高まるなかで、IR室を設置する等の体制の整備が望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上記の学習成果の測定及び可視化の方法を策定した後に検討を行う。 ・体制整備に関する検討はまだ行われていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体制整備に関する検討を進める必要がある。
<p>【内部質保証】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習成果を可視化するための指標（ルーブリック評価の達成度、KPI等）を設けて教育の達成度を常時モニターする。 ・自己点検・評価委員会、内部質保証委員会、大学評議会が連携して改善策を実施するPDCAサイクルを実質的に機能させる。 ・教学マネジメント体制の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ・教務課と連携してルーブリック評価の達成度を測定する指標を開発する。 ・IR委員会と連携してKPIを開発する。 ・内部質保証委員会を定例（6月、10月、2月）で開催し、事業報告、自己点検・評価に関する報告書、各種調査結果（卒業生アンケート等）に基づいて改善すべき点を抽出し、改善策を定めて大学評議会に提出する。 ・2018年度に実施された大学基準協会の認証評価結果をふまえ、内部質保証委員会の議題に挙げて協議し、教学マネジメント体制確立に向けて検討を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「アセスメント・ポリシー」に基づいて学習成果を評価するためのデータを収集する。学科内活動状況、クラブ・サークル、ボランティア活動等のデータを整理し、教務関係、就職関係のデータと統合して分析を進める。 ・2019年6月に開催予定の内部質保証委員会で検討を開始する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・FD研修でルーブリックに基づく学内データを取り上げ、現状の問題点を確認した。学科内活動、クラブ・サークル、ボランティア活動等のデータと教務、就職関係のデータの整理分析については未着手である。現状では、IR機能に専任のスタッフを配置できないので目標どおりの執行状況にない。 ・内部質保証委員会は予定どおり6月、10月、2月に開催し、PDCAサイクルは回っている。 ・予定どおり内部質保証委員会で取り上げ、検討中である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度は左記のとおりであった。次年度の課題として取り組んでいく。 ・財務状況の改善などの単年度で完結しない課題は継続して進捗管理をしていく。 ・さらなる現状分析を行い、具体的な優先課題を抽出し、FD委員会と連携しながら順次取り組んでいく。